

大館市餅田根下戸道下

# 芋掘沢遺跡発掘調査報告書

大館市教育委員会

昭和47年3月

大館市餅田根下戸道下

芋掘沢遺跡  
発掘調査報告書

奥山 潤

昭和 47 年 3 月

目 次

|  |    |
|--|----|
| 序 文                                      |    |
| 例 言                                      |    |
| 第1章 遺跡の位置と環境                             | 1  |
| 1 位 置                                    | 1  |
| 2 地形と環境                                  | 1  |
| 第2章 発掘調査と経過                              | 3  |
| 1 理 由                                    | 3  |
| 2 調査日誌                                   | 4  |
| 第3章 出土遺物                                 | 6  |
| 1 土器・土製品                                 | 6  |
| 2 石器・石製品                                 | 32 |
| 第4章 考 察                                  | 33 |
| 第5章 総 括                                  | 36 |
| 参考文献                                     | 37 |
| 付録Ⅰ 7月15日芋掘沢緊急調査時の出土遺物                   | 56 |
| 付録Ⅱ 餅田家敷添発掘のピット〔第26図〕                    | 64 |
| 付録Ⅲ この報告書を教材として扱われる<br>市内小・中学校社会科担当の先生方に | 65 |

図・図版目次

|                     |    |                      |    |
|---------------------|----|----------------------|----|
| 第1図 (1)遺跡の位置        | 2  | 口 絵 カメ棺出土状況          |    |
| 第2図 餅田付近航空写真        | 4  | 口絵裏                  |    |
| 第3図 トレンチ配置図         | 5  | 図版1 (上)土器1 (下)土器2    | 38 |
| 第4図 第1群土器拓影         | 7  | 図版2 (上)土器4 (下)土器3    | 38 |
| 第5図 第2群土器拓影         | 9  | 図版3 (上)土器6 (下)土器片製円板 | 39 |
| 第6図 第2, 第3群土器拓影     | 11 | 図版4 (上)土器10 (下)土器7   | 40 |
| 第7図 第3, 第4, 第5群土器拓影 | 13 | 図版5 (上)土器5 (下)土器8    | 40 |
| 第8図 第5, 第6群土器拓影     | 16 | 図版6 第1群土器(1)         | 41 |
| 第9図 第6, 第7群, 其他土器拓影 | 17 | 図版7 第1群土器(2)         | 42 |
| 第10図 体部破片及底部拓影      | 19 | 図版8 第2群土器            | 43 |
| 第11図 復原土器1          | 22 | 図版9 第2, 第3群土器        | 44 |
| 第12図 復原土器5          | 23 | 図版10 第4群土器           | 45 |
| 第13図 復原土器2          | 24 | 図版11 第9群土器           | 46 |
| 第14図 復原土器3          | 25 | 図版12 第6, 7群土器        | 47 |
| 第15図 復原土器4          | 26 | 図版13 其他の土器, 体部破片, 底部 | 48 |
| 第16図 復原土器6          | 27 | 図版14 石 器(1)          | 49 |
| 第17図 復原土器7          | 28 | 図版15 石 器(2)          | 50 |
| 第18図 復原土器8          | 29 | 図版16 石 器(3)          | 51 |
| 第19図 復原土器9          | 30 | 図版17 土器9 (出土状況)      | 52 |
| 第20図 復原土器10         | 31 | 図版18 土器出土状況          | 53 |
| 第21図 土器片製円板         | 21 |                      |    |
| 第22図 A, Eトレンチ壁土層図   | 52 |                      |    |
| 第23図 7月15日発掘土器(1)   | 58 |                      |    |
| 第24図 7月15日発掘土器      | 59 |                      |    |
| 第25図 7月15日発掘石器      | 62 |                      |    |
| 第26図 餅田家敷添発掘のピット    | 64 |                      |    |



口 絵 カメ棺出土状況

Fig 2 餅田付近航空写真 (○印芋掘沢遺跡)



## 序

この報告書は、大館市教育委員会が主催して発掘を行なった大館市字根下戸芋掘沢遺跡の調査結果をまとめたものであります。

この遺跡は、県立大館桂高等学校校舎新築敷地の造成工事中に発見されました。工事のため遺跡が破壊されますので、その前に遺跡の内容を学術的に明らかにする目的で、昭和45年8月17、18、19、20日の4日間にわたって緊急に発掘調査を実施したのであります。

郷土の美しい自然を守り、歴史を学び、そして祖先の残した文化財を大切にすゝる気運を一層高めるため市民の皆さんにご活用ねがえれば幸いです。

最後に、発掘調査から報告書のまとめまで熱心にご指導ご協力をいただいた奥山 潤氏をはじめ、盛夏の炎天下に発掘にあたった調査員田中修造氏、調査補助員佐藤幸英氏、発掘員大館桂高校、大館鳳鳴高校社会部生徒の皆さんに心から謝意を表します。

昭和47年1月20日

大館市教育委員会

教育長 伊 藤 経 雄

## 例 言

- 1 この報告は、昭和45年8月中の4日間、大館市餅田字根下戸道下芋掘沢で、第2番目に学術調査された遺跡の調査概要である。
- 2 この調査は大館市教育委員会が主催した。法的調査責任者は教育長伊藤経雄、発掘担当者は奥山潤である。
- 3 出土遺物の整理には県立大館桂高校社会部考古学班が当たり、現場写真は県立十和田高校大里勝蔵氏のフィルムを、遺物写真は大館市史編さん委員山田福男氏による。
- 4 図・拓影の構成、報文の作成には奥山が当った。なお図版の土器（破片）は、被写性の良いものだけを選別して撮影した。
- 5 付録として本遺跡の緊急予備調査の出土遺物についての桂高校の報告原稿、家敷添遺跡の一部記録を加えた。

## 第1章 遺跡の位置と環境

### 1 位 置

ここで芋掘沢遺跡と呼ぶのは、地籍上大館市餅田字根下戸（ネグト）道下で、通称芋掘沢と言われる小さい谷に沿う遺跡群の一部である。芋掘沢遺跡としては筆者らが調査した遺跡につぐ第2の遺跡である。

遺跡の所在地点は、餅田部落の東200mにある。餅田は国道7号線に沿い、大館市役所から西へ約3.3kmで、発掘地点は国道の南300mに位置する。

### 2 地形と環境

遺跡は米代川と長木川にはさまれた、平坦な河岸段丘で、段丘は十和田火山源の火砕流とその第2次堆積物で構成されている。芋掘沢はシラスと呼ばれるその平坦な堆積面に刻みこまれた浸蝕谷で、シラス台地独特の急斜面段丘崖を伴っている。

この沢は遺跡の東約1.2kmの地点から、西に向って開け、遺跡のすぐ北で方向を南西に転じ、山田渡の南東で米代川に入る。幅50mに満たない狭い沢で、沢底を細い水流が流れていた。いわば降雨時の集水路と低湿地をかねていた。

標高は付近の国道上の一地点で58.7mを示す。国道の北300mで西流する長木川岸に、南800mは米代川岸である。遺跡の北々東、目前に比高62m（標高126m）の二ツ山の独立丘が火砕流台地上の「島」のように残っている。この島は長木川南岸に接するが、北岸に迫る第3紀層丘陵の南縁突出部分にあたり、長木川に侵蝕切断されたものである。この山の北側が、花矢方面から南下してくる下内川と、長木川との合流点で、両川の合計水勢がこの山地を分離したものであろう。

火砕流の河岸段丘は、第2次堆積物の堆積後に著しい側面浸蝕を受け、川の貫入蛇行の跡を地形上にも残している。たとえば餅田部落の西端部の湾入した段丘崖がそれで、航空写真の色調によれば、両川が現在の合流点におちつくまでのいく度かの流路変更があったことがわかる。この現在は埋没している旧蛇行河川の流路と、先史遺跡の分布は密接な関係がある。

台地表面の侵蝕は芋掘沢に集約された観があるが、今回発掘した遺跡の西側から、餅田の集落にかけて、ゆるく傾いた浸蝕面を残し、同時に遺跡地点のせまい芋掘沢でも中位面を残している。

沢底の最下位面はおそらく、後世の堆積物特に約1000年前のシラス洪水による堆積物の下に埋没しているであろう。台地上には湧水がないが火砕流第2次層下には礫層があり滞水している。

享保郡邑記成立当時、いまの餅田集落は大掘村と称された。持田と書くのが正しい。この頃60年ほどの間にはじめ約60戸の集落は20戸に減少している。



だが全く異なった経済構造に生きた縄文時代人にとって、この現在環境は何らの制約を意味しない。米代川と長木川の蛇行やそれに伴う半月沼は独木舟の航行には好条件で、多くの淡水魚貝を供給し、湿地は球根やクリ、トチ等の食用植物の生育に適し、台地と北の山地は食用の小動物を提供し、漂鳥や季節ごとに天をお、う渡り鳥は有力な食料資源であった。

水流のある芋掘沢の岸やせまい中位面に、ある期間定住した縄文人の生活遺跡が残されたのは当然であろう。

しかし現在、これらの安定した自然環境は学校敷地や道路の建設のため全く失なわれ、そこには緑を失なった灰色の砂漠のようなシラスが、天日にその肌をさらす荒れた風景を残すだけである。

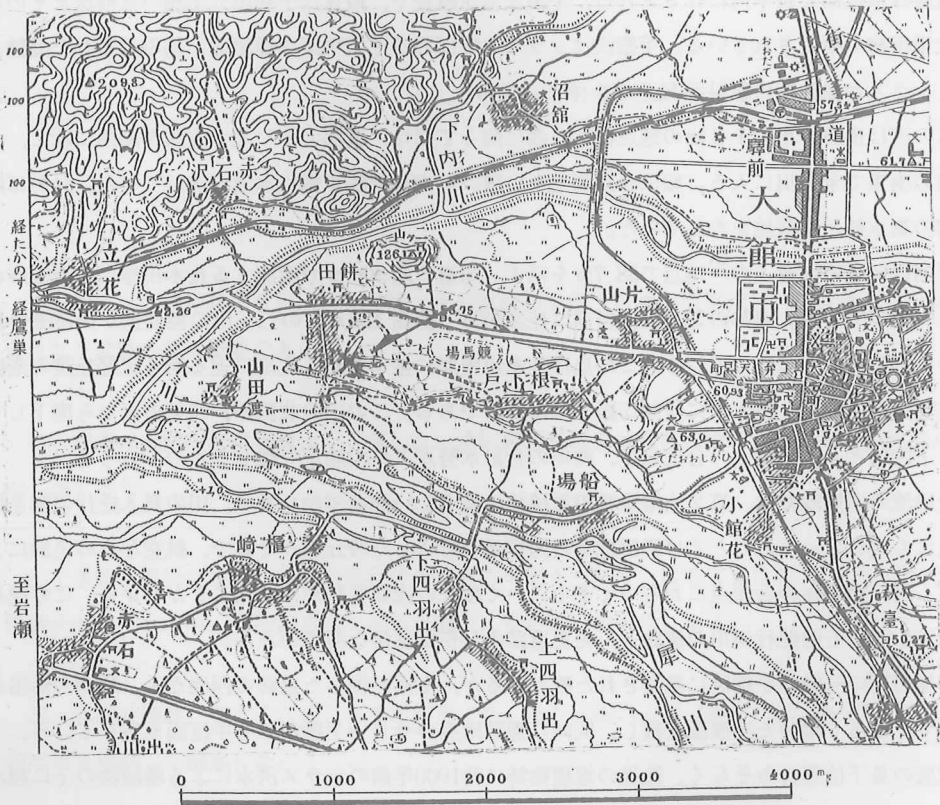


Fig 1 遺跡の位置 (×印)

## 第2章 発掘調査とその経過

### 1 理由

県立大館桂高等学校の新築移転のため、餅田地区で校地造成の土木工事が開始された。

この年、鹿角郡十和田町黒森山スキー場の工事により発見された縄文期竪穴群の発掘を夏季に実施する予定があり、これにそなえ、数次にわたり大館鳳鳴高校社会部と大館桂高校社会部員の発掘訓練をする計画をたて、黒土がうすく、ローム中に掘り込まれたピット等を簡単に発見できる地点として芋掘沢の一部がえらばれ、6月21日にこの計画を実施した。好都合なことに、既に校地造成工事に伴い、芋掘沢西岸の一部は耕作を中止していた土地があったためである。その際に土木工事の現場責任者に、文化財保護上の手続義務を説明し、併せて大館市建設課の工事担当者にも説明し、工事の進捗に伴い埋蔵文化財出現の際の情報提供を依頼しておいた。

なぜならば、この芋掘沢周辺に、秋田県遺跡地名表に登録された遺跡は山田渡一ヶ所よりないが、筆者らによる発掘報告の公表されている特異なピット、西方近距離にある餅田家敷添にある豊富な縄文遺跡ほか、土器出土の情報が多く、法による「周知の遺跡」に属する一帯だからである。

しばらくして土木業者から市教委に遺物出現の届出があった。教委社教課は、鳳鳴高校社会部OBで市役所に在職している佐藤幸英君とともに現地を確認し、同君が筆者にその出土遺物を持参した。

遺物出土地点が桂高校新敷地とせまい沢をへだてた地点であることから、直ちに緊急発掘の手続をし、桂高校長を責任者とし、奥山を担当とする全校社会部員の発掘班が、その地点の発掘を試みたのは、昭和45年7月15日である。

遺物の散布は発掘地点まで北から80mほどの幅で沢添いに見られ、意外に広い遺跡であることを物語っていた。

この際の発掘地点は上部が既にブルドーザーで破壊されていたばかりでなく、それより先上層部はおそらく江戸時代の耕地造成の際に消滅していたらしい形跡が観察された。また円筒上層式の下部、円筒下層式の上層ばかりでなく、深く円筒下層式の縄文前期に及ぶ遺跡であることを確かめることができた。

このため行政発掘を、同年8月17日から19日まで3日間実施することを決定し、市教委より奥山と桂高校の田中修造氏に発掘調査の依頼があり、それまでの1ヶ月間、全地点の工事の進捗を停止する措置をとり現場を保存した。

このような理由と状況下に同地点の発掘調査が実施された。当市に於ける教育委員会主催の発掘調査としては最初のことであった。

## 2 調査日誌

昭和45年8月17日 晴

午前9時道具、天幕等運搬。発掘現場の最上部遺物含有のない黒土層をブルドーザーで削土してもらう。東西方向に幅2mのAトレンチ、5mへだてて幅2m、長さ8mのBトレンチ、これより4mへだてて幅2m、長さ5mのCトレンチを設定。担当者より発掘開始の指示。

Aトレンチの東端は斜面にそい東に延ばすものとし、Bトレンチは南北にのびる芋掘沢と同方向の平坦な面にそい、Cトレンチは西方に台地の上面に向う。ブルで削った見かけの第1層下にうすい濃黄色の火山灰層出現。これが西方300mの餅田家敷添遺跡の円筒上層A式～全下層d式土器の包含地にも見られる、うすい黄褐色火山灰層と同一のもので、大湯降下浮石層後の十和田火山最後の軽石流である。(両火山灰は鉱物組成が近似。大湯浮石層の分布西限は、白沢一達子森を結ぶ線である。)

BトレンチとCトレンチの間には火砕流の第2次堆積物と考えられるシラス層出現。遺物包含層はB→Aトレンチの方向、即ち北側が厚いものと判定された。

Aトレンチでは中央部、南側、東側に土器出現。最も深い層では深度77cmで円筒土器(下層b式)出土。

Bトレンチの見掛けの第3層に遺物出現はじめる。円筒土器大片。北側に土器、第2層で深度50cm。第3層に石錘、中央部に土器大片。西側では第1層の厚さ12cm、第2層の厚さ33cm。

Cトレンチでは見掛けの第3層(黒土層)で深さ15cm、河原石が散在。中央部より有孔河原石。中央部に石斧。中央部深さ55cmまで下げる。この部分土器片多い。

Bトレンチ下段にDトレンチ設置。トレンチ中央より北側(Aトレンチに近い方)に、河原石や土器片。

8月18日 曇

Aトレンチ、昨日からの作業続行。東側に拡張。第1層より石のみ1個、黒よう石(原材)東側に高さ35cmの土器大片。拡張区では河原石多い。拡張区は延長2m(第1区)3m(第2区)幅は2m。第2区から土器3個のや、大片出土。(第2層)

Bトレンチでは中央部に円下b式土器(見かけの第4層)第3層にも土器片。西側に石多く、東側に土器片多量。うち2個体は倒立。南拡張区は深さ20cm、北側は90cmに達す。石錘、北側に多数出土。

Cトレンチ第3層石錘2個、石鏃2個、石錘1個出土。中央部に土器多い(円下c式?)

Dトレンチでは全面多量の河原石。

中段Dトレンチと、Aトレンチ拡張区にかけ幅15m、長さ3mのEトレンチ設定。土器片多量。また多量の木炭を伴う。一種の炉と思われる。

Cトレンチの中央にFトレンチを設ける。幅1.5m、南側は土器片、北西区は長径80cm、短径60cmの大きい平石出土。土器3～4個体分あるもすべてこわれ細片化(円下a式?)

8月19日 晴

第1拡張区を第2拡張区のレベルまで掘り下げる。第1, 第2拡張区にかけて混土層中より土器出土。第1, 第2拡張区を南側に拡張 (Dトレンチの方へ) 土器群出土。河原石も多量。南拡張区の深度80cmにピット出現, 中から長い河原石2個を蓋した円下d式土器がほぼ直立して出現。カメ棺を推定させた。

Bトレンチは掘り下げ, 有孔の河原石2個を発見。径いずれも8cm。中央北区の土器深さ90~110cm 12, 3片。

Dトレンチの南側は第4層に達す。土器片大片散乱。(3~4個体分)

Fトレンチ, 黒土層から帯黒褐色土層にうつる。土器片少し。石器は石匙1個, 石鏃1個。CトレンチとCトレンチの間に幅1m, 長さ1.5mのGトレンチ設定, 土器, 石匙1個出土。本日で教委主催発掘終了。進行状況により担当者より1日延長の指示あり。夕方公民館で教委の慰労会あり。

8月20日 晴

Aトレンチ南拡張区掘り下げ, 深さ120cmで土器, 第2拡張区で深さ90cm。第1拡張区では深さ120cmで, 幅50cm, 長さ60cmの焼土出現。木炭がある。南拡張区深さ130cmから170cmにかけて土器出現。

Bトレンチ中央から南東区にかけて土器群多量, 深度130cm。

Bトレンチ東拡張区幅2m, 長さ1.5m拡張。第2層は黄褐色砂質。深さ60cm。石群多い。東区に深さ80cm, 85cm, 90cm, 110cmに石鏃1個ずつ出土。土器は95cmで出土。

Dトレンチ西壁とAトレンチ北壁の土層断面図作成。連日この夏最高の猛暑続き, 発掘員の能力も限界にきた様子であるが, 一同元気。道具収容, 遺物とともに各校に車で運搬。担当者より, 調査団の解団を指示。作業終了。

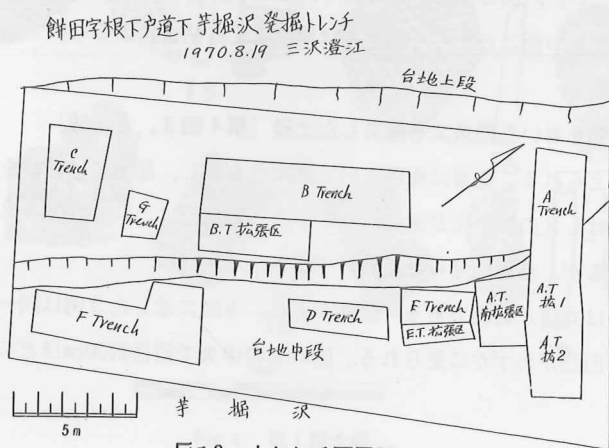


Fig 3 トレンチ配置図

## 第3章 出土遺物

### I 土器・土製品

発掘した土器には復原できたものが少なかったが先に口縁部、体部、底部の代表的な破片部分をえらび、分類して簡単に説明を加える。

#### A 第1群土器 条痕文土器，縄文・条痕文土器

厳密に言えば，器表に貝殻条痕ある土器と，器表に縄文或いは捺糸文を施文し，土器内面に貝殻条痕ある土器の二亜群に大別される。第4図拓影がこの群である。

この群(図版6, 7)にはここに掲げた土器のほか第5図の一部を含み復原できるものがない。このことは他群土器の一部にも共通する点で，この事実の意味することについては後に考察の章で言及した。

##### a 第1亜群土器

###### 第1類土器〔第4図1〕

胎土に細砂粒をわずかに混入した，堅い焼成の土器で，器表は黒褐色か黄褐色で，等間隔の平行沈線文が器面を縦走する。この平行沈線は実のところ貝の縁端をつかった条痕であるか，櫛状工具による引掻文であるか施文本体が不明である。この平行沈線に直交して，まばらでや・浅く鋭い沈線が画かれている。体部の破片である。

###### 第2類土器〔第4図2〕

胎土に多量の繊維を含み，わずかに砂粒を混在するが，白い紙にコンテのように描くことができるほど炭化が著るしい。内面は明るい黄褐色で，なめらかであるが，器表には浅い貝殻条痕が並走する。器内面の黄褐色の面はおそらく胎土とは異なる化粧粘土によるものである。

##### b 第2亜群土器

###### 第3類土器 間をおいた捺糸文を施文した土器〔第4図3, 6, 10〕

大型の土器と考えられる。器表は褐色ないし黒褐色を呈し，胎土には砂粒をわずかに含み，焼成よく硬い。器表にはLRの捺糸文が施文されている。器内面にはヘラ状工具による調整痕のほか，貝殻条痕が見られるが，全面に見られるわけでない。

この土器は或いは丸底か尖底である可能性がある。本図に示した3例は同一器体と考えられる。器表裏に指押しの凹凸がわずかに見られる。図の3の中央で器径約20cmほどに考えられる。

c 第3亜群土器

第4類土器 細い縄文の土器〔第4図4, 9, 15〕

細かい縄と思われる施文を重ねている。あるいは撚糸文かもしれない。胎土にわずか砂粒を混じ、硬い。内面の条痕は幅が広く顕著である。

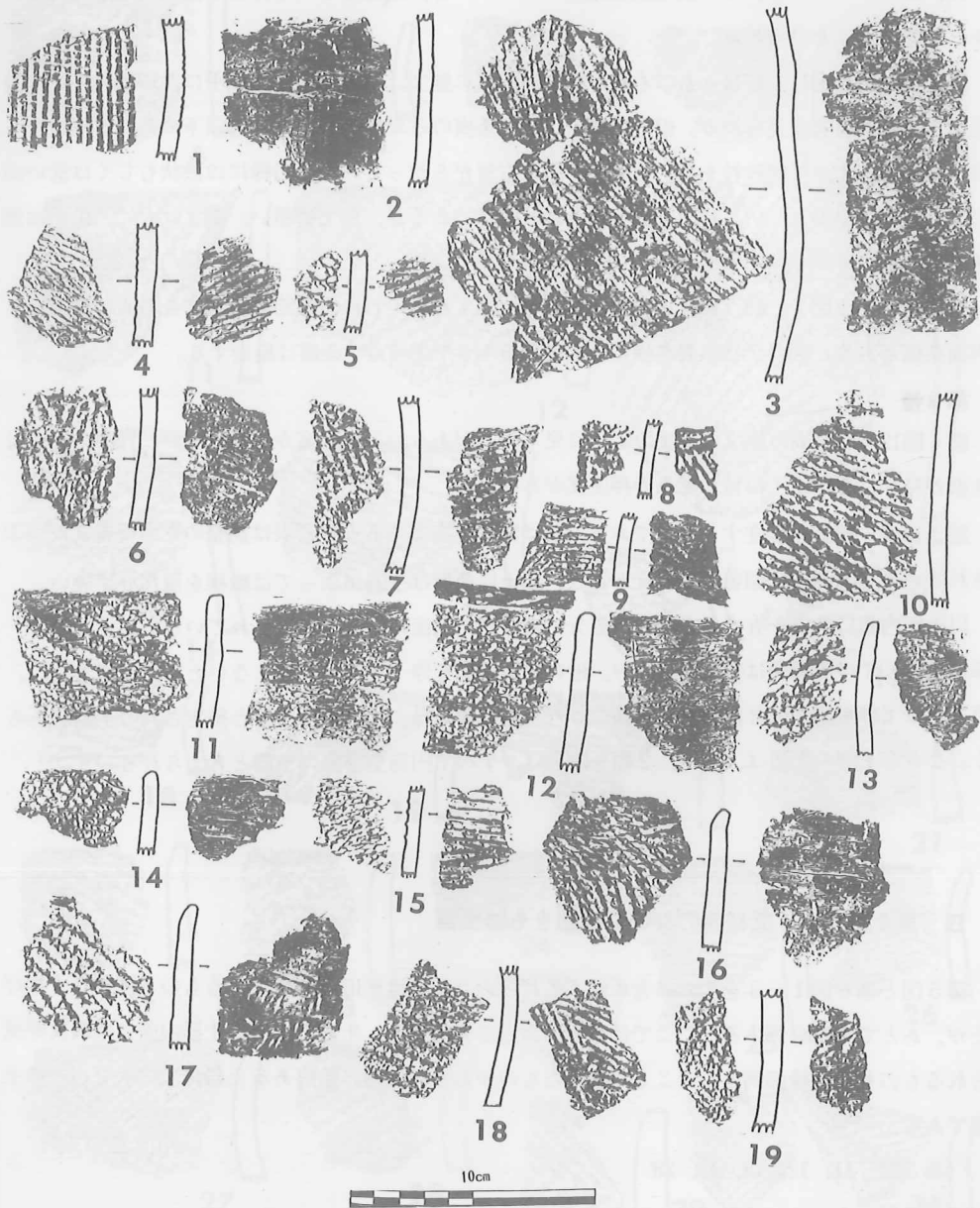


Fig 4 第1群土器

### 第5類土器 やゝ太い燃糸文ある土器〔第4図12〕

細かい横走る燃糸文の口縁部文様帯の下に右斜の燃糸文が見られる。胎土は粗く、砂粒を混ざる。横走る貝殻条痕が器内面の口縁部にみられる。

### 第6類土器 縄文ある土器〔第4図11, 17, 7, 12, 13, 14, 18, 19〕

11, 17のグループと、7~14の異条縄文のグループと、縄文あるいは特殊な燃糸文と思われるグループの3種に分けられる。

**第1種** 第4図11, 17はともに右斜の縄文を器表に施文、器内面に11は水平に、17はわずかに斜走る浅い条痕文が見られる。但し11は、口縁部条痕のみが横走り、口縁部以下の条痕は縦走する。11は胎土にわずかに細砂粒を混入し硬い。図の右肩があがっていて、口縁には波状もしくは低い山形突起がある土器らしい。17の器質も11とほぼ同様であるが、胎土は粗い。縄文は太く、色沢は黒色を呈する。

**第2種** 第4図7, 13, 14, 19の土器である。いずれもいわゆる複節異条縄文を器表に施文し、内面条痕がある。図の7は器表を横にして考えるべきであろう。条痕は縦走する。

#### 第3種

第4図12, 18器表の施文は縄文のように見られるがあるいは燃糸文かもしれない。12の内面には条痕が見られるほか、口唇に燃糸の押圧文がある。

胎土はやゝ繊維を混在するようである。18は同種の施文であるが器表は調整のためか施文がつぶされている。内面には顕著な条痕文があり、胎土に条痕は土器によっては繊維を混在せず硬い。

以上が内面に条痕を有する土器の大部分であるが、内面の全面に施文されていないことが多く、風化剝離している場合は判定しにくい。他に内面条痕を伴う土器が存在しないと断定できない。第5図以下でも第4図と器表文様の類似した土器の中には、条痕ある土器と推定される土器もある。なお第1群の土器は、第1, 2類を除けば、すべて円筒型平底の土器と考えられる。

## B 第2群土器 文様帯のない口縁部をもつ土器

第5図と第6図1~3をこれに含めた。これらのうちには新旧の時代差あるものも区別なく掲げたが、あとで考察分類する。ここでは類形によって分類する。先述のように土器内面に条痕文が見られるものも、口縁部例としてここに含めたものがある。内面に条痕ある土器は次のナンバーの土器である。

〔第5図〕 11, 12, 13, 18, 28

〔第6図〕 1

以下各類に大別して説明を加える。

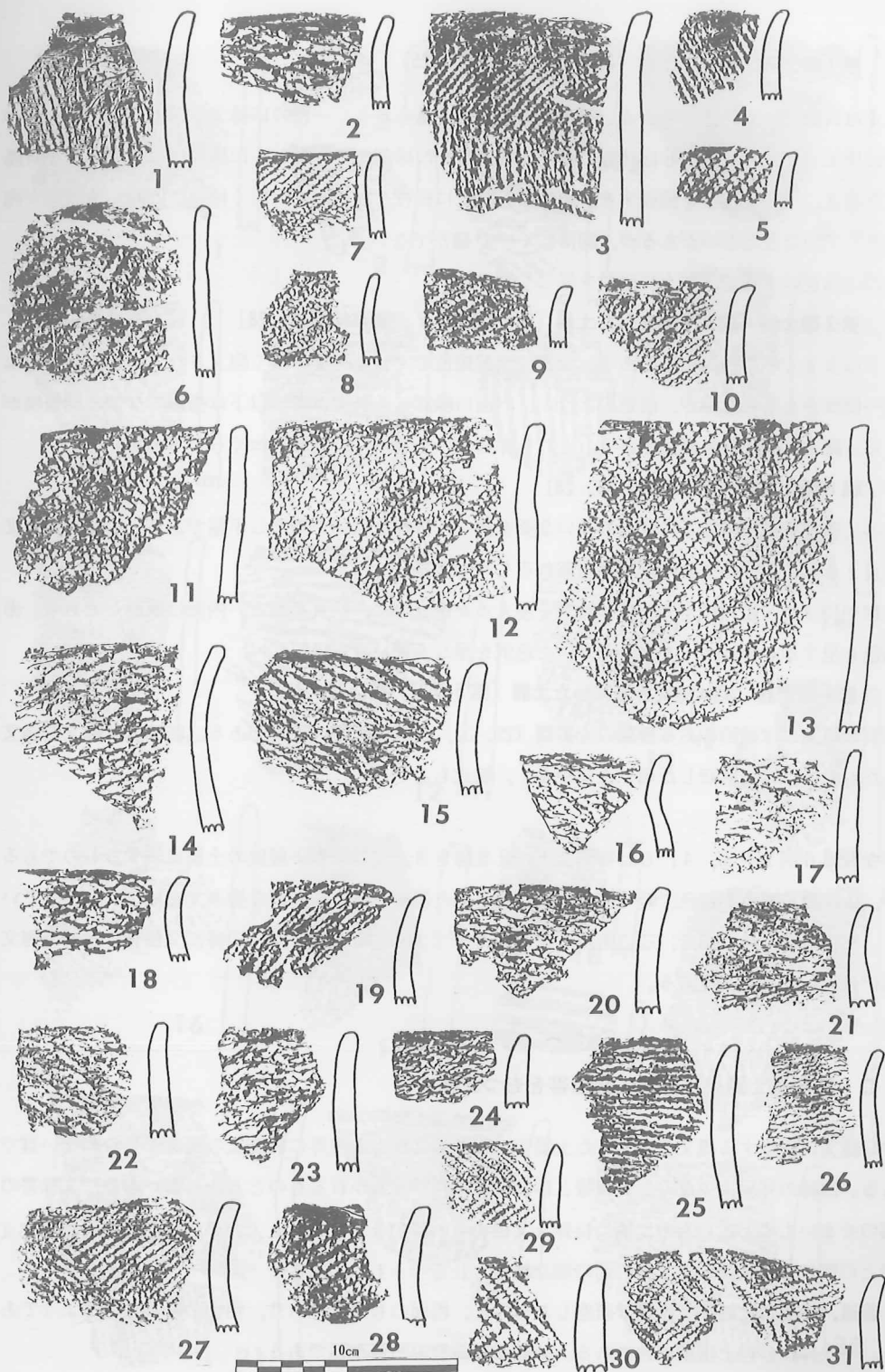


Fig 5 第2群土器



### 第1類土器 撚糸文土器〔第5図1, 3, 4, 25〕

1は口縁部に太い撚りのゆるい絡糸体の廻転文が見られる。一種の口縁文様帯とも言える。体部には撚糸文が見られる。6は体部に垂直の撚糸文を口縁部まで施文し、口縁部にはその上に左斜縄文を施文、一見文様帯を構成する。両者とも胎土に砂粒を混じ、や、粗く硬い。内面に条痕文が施文されていたうたがいがあがるが、剥落していて確かでない。

25は黒色の土器で、胎土に砂粒を混じて硬い。

### 第2類土器 縄文を施文した土器〔第5図5~7, 9, 10~13, 28〕

6はうすく小口径の土器である。表面は淡黄褐色で太目の縄文が浅く施文されている。11~13は同一個体かもしれないが、前述のように、内面口縁部に条痕文があり以下は指頭でなでた調整痕がある。縄文は複節異条縄文である。これら深鉢形の土器は、口径約20cmぐらいである。

### 第3類土器〔第5図14~24, 26〕

各土器とも撚糸の太さに変化の多い2条を撚った特殊な原体で施文し不整である。中には撚糸文と言えるものも、絡糸体圧痕文と思われるものもある。

14や15はや、粗い粘土で砂粒と繊維を混えるが焼成悪く、軟質である。内面は磨研してある。赤褐色を呈する。他はすべて黒みがかった色沢を呈し、硬い。

### 第4類土器 羽状縄文を施文した土器〔第5図27, 29, 30, 31〕

羽状縄文には結節のある種類の土器類(29, 31)とない土器(27)がある。結節羽状縄文を施文したものには内面磨研した硬い土器が多く、焼成もよい。

なお第6図1~3, 4, 6は特殊な1, 2を除き3, 6は最も下層位の土器に属するものであるが、1は焼成悪く赤褐色で軽く第5図14, 15と似た器質である。不整な撚糸文を縦位に施文している。6は円筒形の土器で、このあたりから、やがて次の群に移行する、口縁部文様帯にまがう施文法が発生してくる例である。

## C 第3群土器 口縁部に文様帯をもつ土器

口縁文に横走る縄文を施文した土器で、胴体部文様との境界に装飾文の施文が見られない群である。口縁の外反は少なく、文様帯と体部文様が判然とわかれるものとわかれぬもの、文様帯の幅のせまいものと広いもの、稀に特殊な文様をもつものなどにわかれ、次の口縁部文様帯と体部文様との間に装飾文のある土器の前時期に編年されるべきものもある。

普通、内面に化粧粘土を塗り研磨したものと、粗面のものがあり、粗面のものが古いようである。胎土には砂粒と繊維が含まれる。一般に直筒型の円筒土器である。

この群の土器については格別に説明を要することもないので省略する。

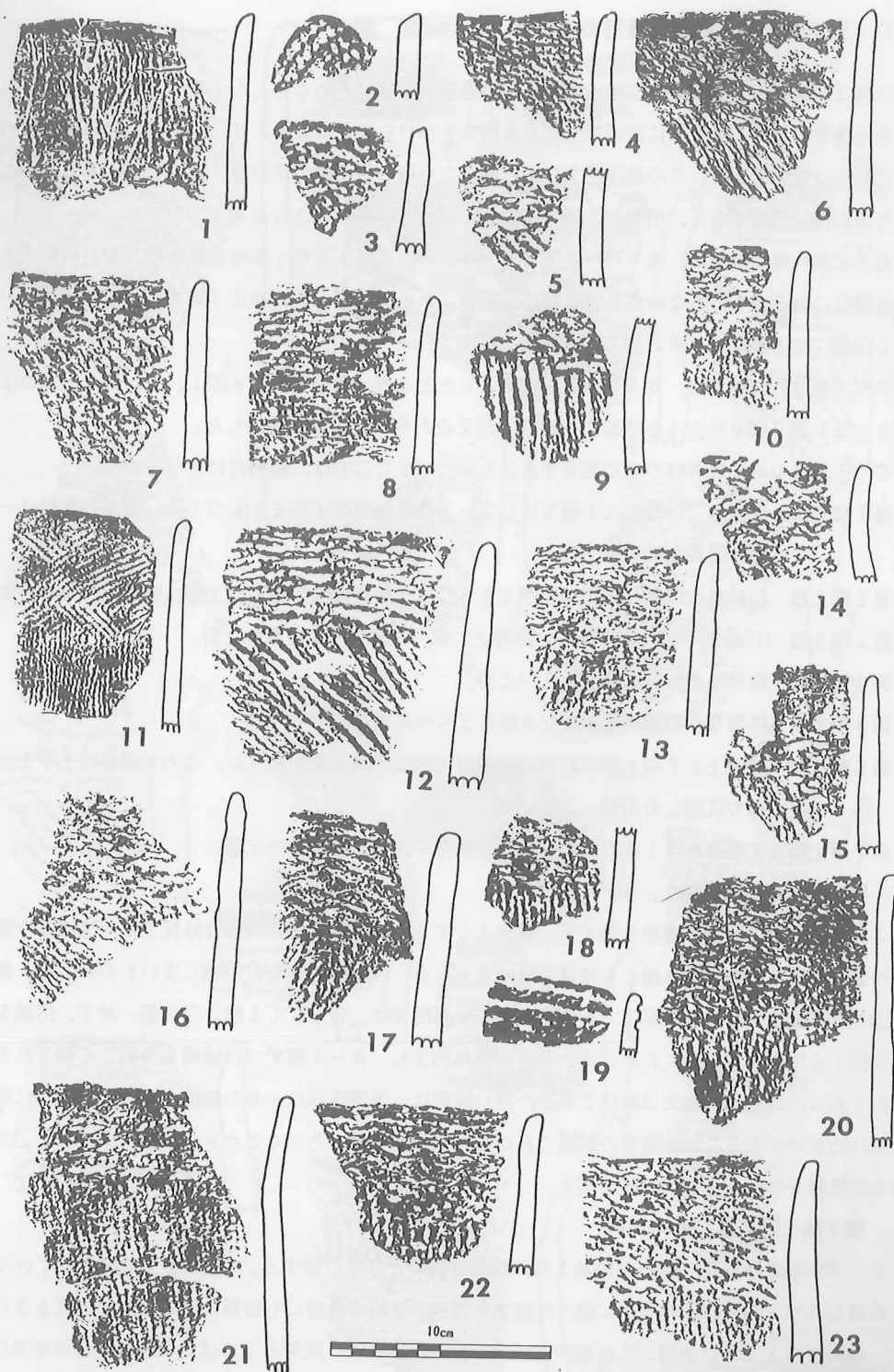


Fig 6 第2, 第4群土器

#### D 第4群土器 頸部に隆帯ある土器

口縁文様帯と体部との境界に粘土による貼付隆帯（突帯）をめぐらした土器である。特色はむしろその隆帯でなく、隆帯上に指頭押圧による凹文をつけることにある。特に口唇部に同一文様をつけたものは重要である。この指圧凹文はまた稀に太い縄の目、縄の結び目、竹管によることがある。また指頭押圧凹文でなく、爪型文の場合もあり、区別しにくいこともある。

東北北部の縄文前期は、後半の円筒下層 a～d 式と、近頃ようやく解明されかけてきた円筒式土器の祖型に当るかもしれない前半の数型式土器群にわかれるが、いわゆる「地方色」をも加えて、その理解には困難な点が多い。

芋掘沢遺跡においては、B トレンチを標準としたところ、最下層に第4図1, 2, 第5図6のような土器に第7図9のような隆帯に指頭押圧凹文のある部分破片が共伴した。

この土器については考察の項で再述することに、いまここでは、類別だけをしておく。

第1類土器 口縁端（口唇）に1個ないし2～3個の指頭押圧凹文をもつ土器。頸部の隆帯は一条。隆帯上にも押凹文。

第2類土器 口縁部（口唇）指頭押圧凹文をならべ、数条の隆帯をもつ土器。隆帯上にも押凹文。

第3類土器（口縁部不明）幅のひろい隆帯上に縄の側面押圧文をもつ土器。

第4類土器 隆帯なく竹管刺突文をもつ土器。

第5類土器 隆帯なく指頭押圧凹文を2段にならべた土器。

第6類土器 隆帯上とその上部に数列の指頭押圧凹文と刺突文を施文し、この文様帯の上下を沈線で区画した土器。

第7類土器 1条または1条の隆帯の上に指頭押圧凹文を施文した土器。

##### 第1類土器〔第7図2, 3, 4〕

これらの土器は胎土に繊維を含まず、焼成よくすこぶる硬く厚い。口縁は外反するが文様帯の幅はせまい。第7図2は内外面ともに貝条痕が見られる。内面磨研したものではないものがある。第7図3は半截竹管による爪形文である。2の口唇部凹文は、おそらく1個から2個一対で、周縁を4分割する位置に対称的におかれる。3の口唇部凹文も、3～4個ずつ口縁周を分割して飾られたものである。口縁部の施文は縦位であり、高い隆帯は、土器頸部に一条の細縄を巻き、その上に貼りつけたものであることが隆帯の断面でわかる。すこぶる硬くたたくとカンカン音がする。2, 3も当然隆帯を伴った土器の口縁である。

##### 第2類土器〔第7図9, 10〕

9と10は器質から同一個で、9の第2列の隆帯が10のそれと一致する。内面はよく研磨されている。外反したやゝ高い口縁の上端に縦の爪型文を並び、2段の隆帯にも指頭による小さい押文をならべ、各隆帯の上下及び中間にも指頭押圧凹文をならべている。隆帯の下には、口縁部同様の絡糸体廻転文を施文し、以下右斜行の撚糸文を施文している。胎土にわずかに繊維が含まれるが、軽い。

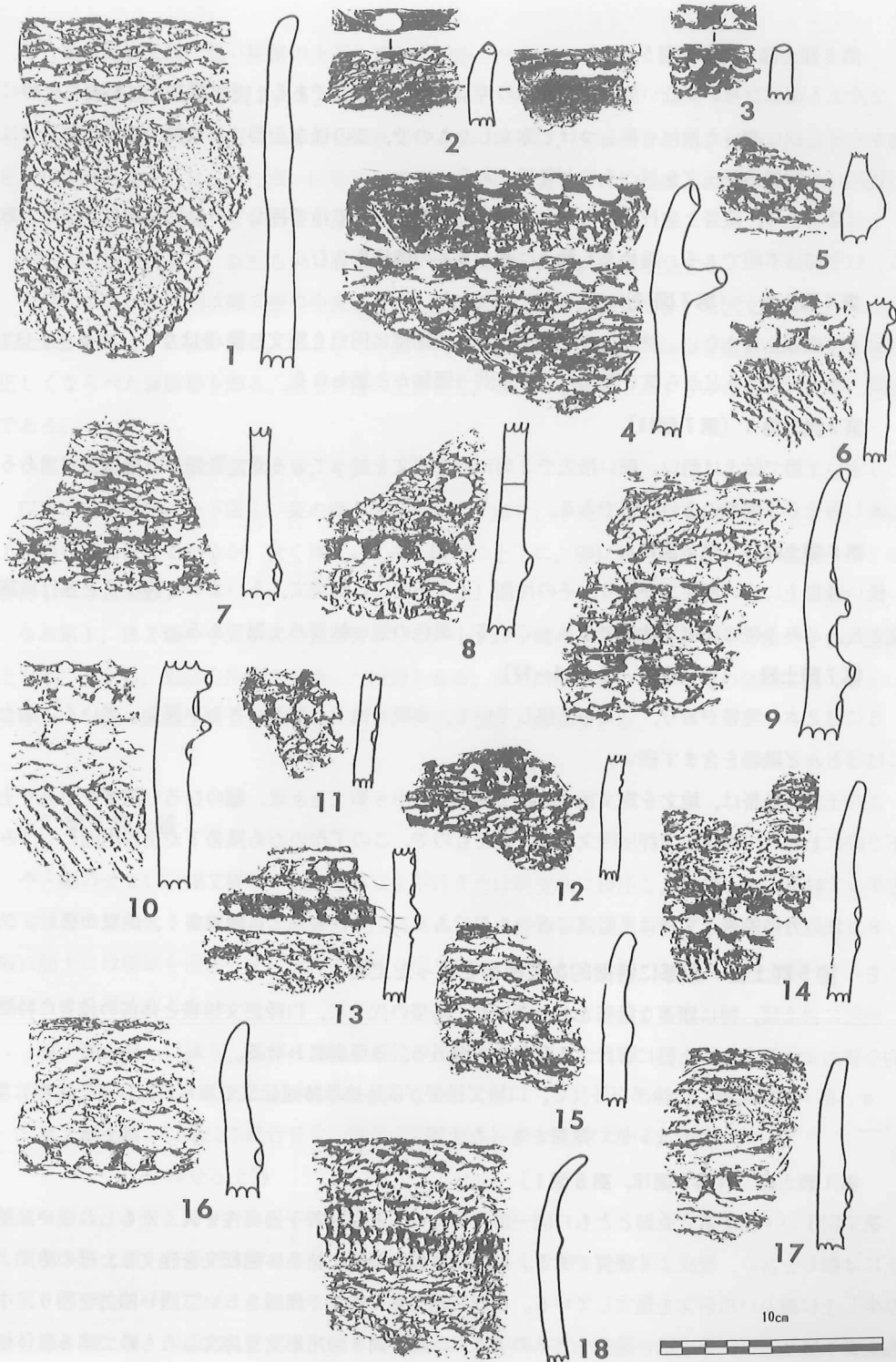


Fig 7 第3, 第4, 第5群土器

### 第3類土器〔第7図5, 7〕

2片とも幅はひろいが低い隆帯上に、繩の押型を飾った土器である。5は隆帯上に斜めに、棒に繩をらせん状に巻いた原体を押しつけて施文したもので、この様な土器は他遺跡での出土知見では口唇部にも同種の押圧文を並べるのが普通である。

7は隆帯上に、隆帯と並行にならべた2本の繩を間をおいて指で押しつけた凹文をもつ土器である。口唇部は不明である。両片とも胎土にやゝ多くの繊維を含む。

### 第4類土器〔第7図12〕

胎土に繊維を含まない。焼成わるく脆い。葭管で頸部に円点を施文し隆帯はない。赤褐色を呈し、色調、胎土、地文などから第5図14の口縁と同一個体かと思われる。

### 第5類土器〔第7図11〕

うすい土器で胎土は粗い。細い指先で2列に押圧凹文を並べているが、隆帯の有無は不明である。しかしおそらく隆帯のない土器である。

### 第6類土器〔第7図11〕

低い隆帯上に浅い押圧文があり、その片側(上下不明)に刺突文、あいまいな押圧文と並行に施文され、この3帯の両側を沈線でしきっている。黒色の強い軟質の土器である。

### 第7類土器〔第7図6, 8, 14~17〕

6には2本の隆帯があり、しかも密接していて、本類の他の土器といささか異なっている。胎土にはほとんど繊維を含まず硬い。

この土器の隆帯は、地文を施文後ヘラ状工具で上下から胎土をよせ、幅のひろい隆帯を中央で上下2段にわけたのち指頭で押圧凹文を施文したもので、この工作のため隆帯下が土器内面にくぼみを作っている。

8と16以外の隆帯上文様は爪型文に近いものである。いずれも胎土に繊維多く、焼成が悪い。

## E 第5群土器 頸部に特徴的な文様帯をもった土器

厳密に言えば、特に顕著な隆帯をもたないが、隆帯の代りに、口縁部文様帯と体部の境界に特徴的な装飾文様帯をもつ土器に移行する型式をも含める。3亜群にわけらる。

- a 第1亜群土器 口縁部が外反し、口縁文様帯が依然絡条体廻転文で飾られ、体部との間に幅のせまい低い隆帯をもった土器

### 第1類土器〔第7図18, 第8図1〕

第7図1の土器を第2亜群とともに同一群に加えることは、若干妥当性を欠くかもしれない。胎土には細砂を含み、焼成よく硬質である。口縁以下10cmの幅に絡条体廻転文を施文し、その中間より少し上に細かい爪形文を施文している。爪形文施文帯に指先で間隔をおいて浅い凹部を作り、中央を少し盛りあげ、その低い隆帯上とその上下に、同じ向きの爪形文を施文したものである。体部の文様は細かい繩文である。

b 第2群土器 低い隆帯の上下を爪型文で飾った土器

第2類土器 [第8図2, 5]

2は左斜行縄文のや、高い口縁部と撚糸文の体部の境界に、2cmほどの間をおいた沈線文の中央を、指で押しながらひらいた浅い凹帯に、間をおいた爪形文をつけ、沈線との間の幅のせまい隆帯部に水平に爪形文を並べた装飾帯を施文している。

胎土には繊維が多く、砂粒も少し混在する。焼成はや、良好。褐色を呈する。

5は13cmほどの、羽状縄文帯の中央より少し上に丸棒、または指頭でひいた凹文を作り、その凹帯上と、凹帯上下の低い隆帯、およびその上下両側に、斜位（隆帯上）および縦位に爪形文を規則正しくならべた装飾帯を飾る。以上2種の土器とも、ほとんど胴部のふくらみのない円筒型の土器である。

第3類土器 [第8図3, 6, 4]

口縁下の装飾帯の上下限を一条の縄の側面圧痕文で飾り、中央に幅のせまい隆帯を作って、その上を縄の側面圧痕で飾るか、全く無文。この小隆帯の上下に、棒に巻いた極めて細い撚糸のコイルを押しつけた土器。

なお第1、第2類の中間様式の装飾帯として、上下限が縄の側面圧痕文。中央の幅のせまい隆帯上とその上下に、縦横の爪形文を飾った種類もある。また同図7は、上下の縄の側圧文間のせまい隆帯上にも縄の側面圧痕文を施文している。8図9は第3群に属する。

## F 第6群土器

や、幅のせまい口縁文様帯に撚糸圧痕文を平行または斜交状に押圧し、口縁上端（口唇）と、体部文様帯の境の低く狭い隆帯に、撚糸の圧痕文または半截竹管刺突文を施文した土器群である。一般に胎土には繊維を混在せず、大粒の砂粒も混えない。焼成がよく固い。内面はよく磨研され、器厚はあまり厚くならない。

第1類土器 口縁端、隆帯に撚糸の縦位の圧痕文を施文した土器

第9図7, 11がこれに当る。口縁は外反しない。

第2類土器 口縁に半截竹管文、境界下限に撚糸圧痕文を施文するか、またはこの逆の施文法をみせる土器

第9図2, 9がこれである。

第3類土器 口縁部に著るしく太い隆帯を貼り撚糸文で飾った土器

第8図17, 第9図13がこれに当る。

第4類土器 口縁部に特異な突起を設けその下に橋状の把手を作り、口縁部、把手等に撚糸文を飾った土器 第9図1がこれである。



Fig 8 第5, 第6群土器

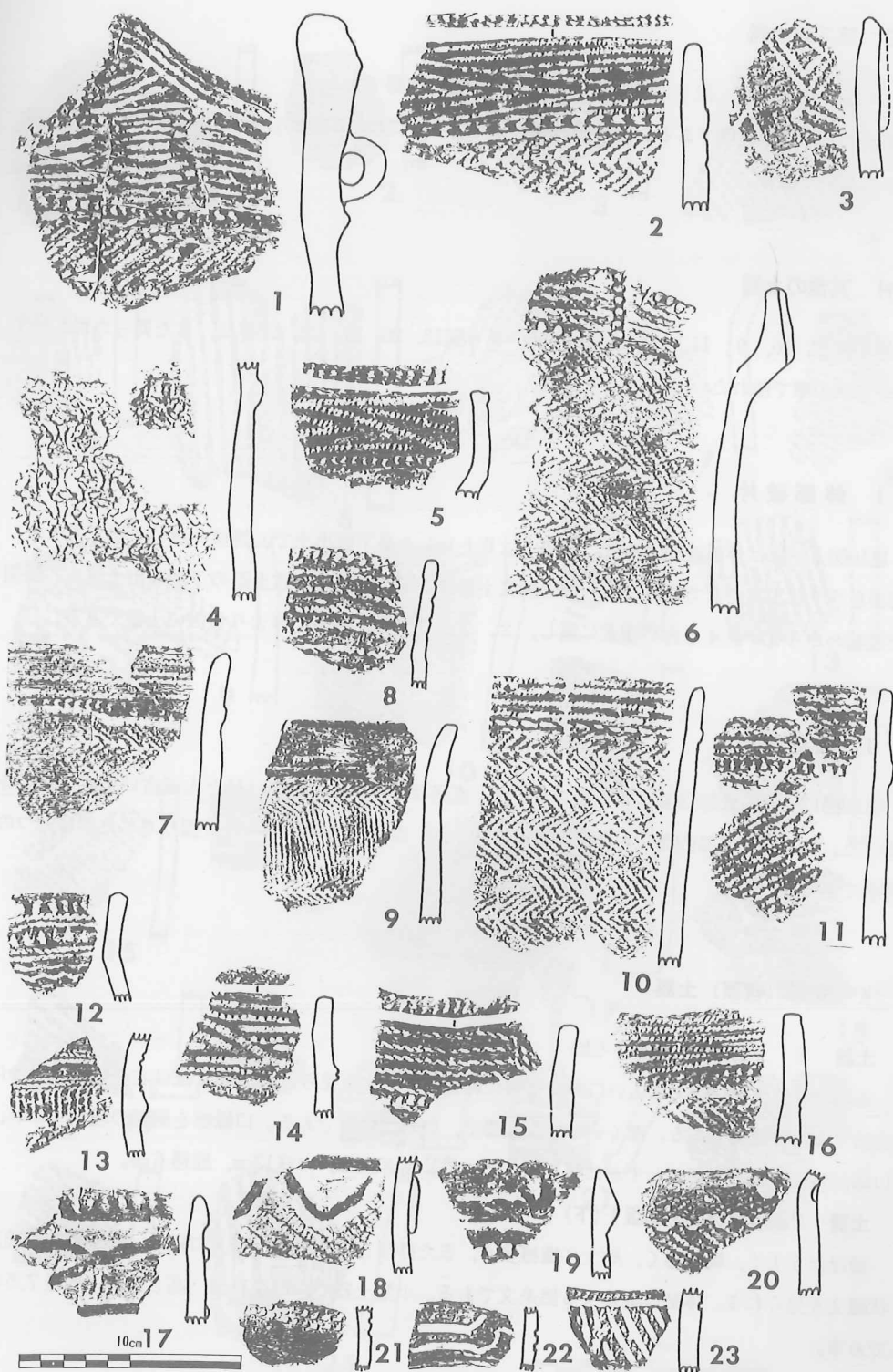


Fig 9 第6, 第7群土器



## G 第7群土器

粘土紐の貼付文が、紐上に撚糸文を施文していない土器である。

第9図17～19の3個である。19は紐が剥脱している。これは口縁部に鋸歯状の粘土紐が貼付られていたものである。

## H 其他の土器

第8図8, 10, 9, 11, 12, 13, 14, 15, 第9図12, 20, 21, 22, 23等は、また異った群に属するが考察の章で触れたい。

## I 体部破片

第10図1～16は体部破片である。同図1はBトレンチ最下底出土で、焼成の悪い土器であるが、器表をヘラ状工具でなでただけの一種の無文土器で、稀に円筒下層式土器の下層に出土する。器型などもわからない。4も古い型式に属し、2, 3, 5～8, 11～13等よりも古い土器である。

## J 底部破片

第10図17～24の底部はすべて平底であるが、直径は小さい。ここではほとんど古い型式のものを掲げた。第10図19は器内面にも条痕がある。19, 20, 22, 23等の底縁の外に張りだした形は一つの特色である。

## K 完形（復原）土器

### 土器 1 [第11図・図版1(上)]

器高の3分の1に達する広い口縁文様帯に絡条体の施文が見られ、体部文様は右斜行のわずかに交錯する斜行縄文である。厚くいびつな土器で、いわば粗製である。口縁部を胴部の境がくびれ、口縁部外反、胴の上部がわずかに張り出している。高さ20cm、口径13cm、底径6cm。

### 土器 2 [第13図・図版1(下)]

器厚がうすく、焼成悪く、胎土に繊維多く、また砂粒を含む脆い土器。口縁の一部が残り結節羽状縄文が見られる。体部は縦走する撚糸文である。小型土器で、口径11cm、高さ17cm、底径7.5cmである。

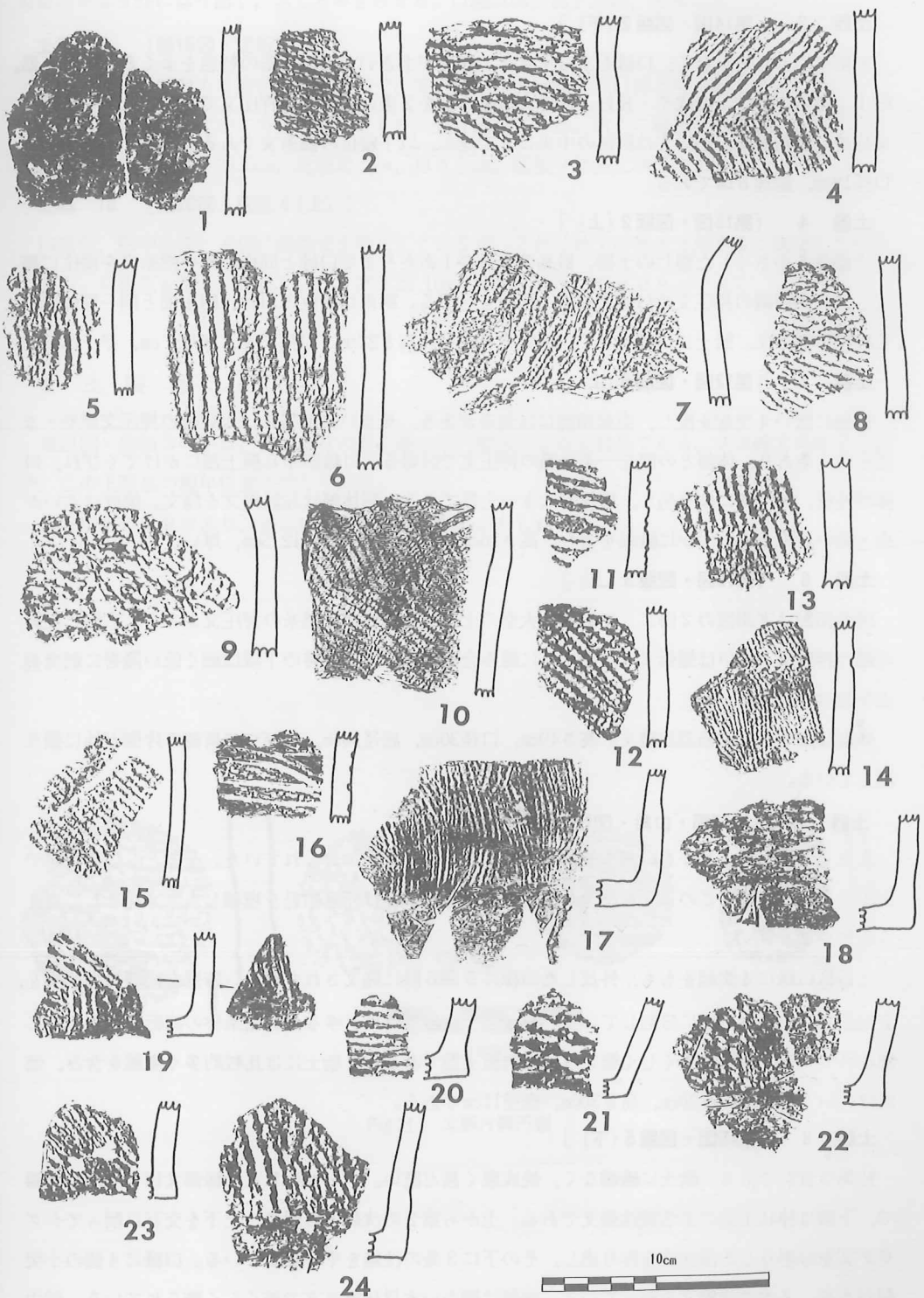


Fig 10 体部破片及底部

土器 3 〔第14図・図版2(下)〕

胴部にふくらみがなく、口縁もまっすぐな、底径が小さいが円筒土器の特色をよく表わした土器。胎土に繊維を含み、焼成や、良好。口縁文様帯下限を2条の繩の側面押圧文で飾る。ただし口縁部文様帯(羽状繩文)と同文は胴部の中央にまで達し、以下縦位の撚糸文である。平底。高さ30.5cm、口径18cm、底径8cmである。

土器 4 〔第15図・図版2(上)〕

土器3を小さくした感じの土器。器高の3分の1あたりまで口縁と同様の細い撚糸文を横位に施し、一条の繩の押圧文で口縁文様帯と胴部を区切る。胴部は縦位の口縁、胴上部と同一原体による縦位の撚糸文。胎土には繊維多く、焼成や、良好。高さ22cm、口径13cm、底径7cm、や、厚い。

土器 5 〔第12図・図版5(上)〕

口縁に低い4突起を配し、突起頂部には刻みがある。せまい文様帯には太い繩の押圧文がや、まばらに3条あり、体部との間を一条の繩の押圧文で区切る。口縁部から胴上部にかけてくびれ、口縁部外反。肩は外にはり出し、底径の大きい土器である。胴体部は左斜繩文を施文。焼成はよいがや、脆い。胎土にわずかに繊維を含む。高さ26cm、口径19cm、底径12.5cm、厚い。

土器 6 〔第16図・図版3(上)〕

図の拓影は実測図の2倍にしてある。大型の土器で、口唇部に撚糸の押圧文があり、右斜と左斜の繩の押圧文(或いは廻転文)をたくみに組み合わせ、この文様帯の下限は細く低い隆帯に刺突列点を並べている。

体部は細やかな結節羽状繩文。高さ49cm、口径30cm、底径20cm、いびつで肩部の片側が外に張り出している。

土器 7 〔第17図・口絵・図版4(下)〕

直立して出土し、しかも口部を長い2個の川原石の蓋がかぶせられていた。土器として好資料であるとともに、普通このような出土のしかたは新産児または死産胎児を埋葬したカメ棺として考えられている。

土器は口縁に4突起をもち、外反した口縁に5～6段に施文された細かい特殊な組紐の押圧文を、突起部で同じ原体で縦に分割している。肩が張り、体部はいわゆる多軸絡条体の廻転文できれいに飾られている。表面は美しく整えられた精製土器であるが、胎土には比較的多く繊維を含み、焼成はいいが脆い。口径20cm、高さ30cm、底径11cmである。

土器 8 〔第18図・図版5(下)〕

特異な資料である。胎土に繊維なく、焼成悪く甚だ脆い。や、外反した口縁部文様の上限は沈線で、下限は棒状工具による破沈線文である。上から第2の沈線との間に、上下を交互に削ってジグザグ文を浮彫りした波状文を作り出し、その下に3条の沈線を平行させている。口縁に4個の小突起があり、2本の沈線文を飾っている。体部は細かい木目状撚糸文で美しく飾られている。胴中

中央部はかなり外にはり出し、ふくらみをみせる。口径21cm、高さ33cm、底径12cmである。

土器 9〔第19図・図版17〕

底径の大きい特色ある形状をした深鉢で、ていねいな羽状縄文が口縁から、胴下端まで施文されている。口縁部がわずかに外反、底に近く外に張り出している。胎土に繊維なく脆い。茶褐色を呈する。口径16cm、高さ24.5cm、底径10.2cm、厚さ5cm。図版9は出土状況である。

土器 10〔第20図・図版4(上)〕

口縁部、胴中央部、下部に綾絡文を施文しているが、これは地文の撚糸文施文後に施文したものである。茶褐色を呈し、口径18.2cm、高さ23.1cm、底径8.6cm、厚さ0.9cmである。

L 土製品

第21図・図版3の下は、土器破片の縁を磨いて円盤状にした土製品である。2は縄文条痕文土器で、この土製品の編年位置を示している。

3の中央には孔があり、他とは性格の異なる土製品かもしれない。

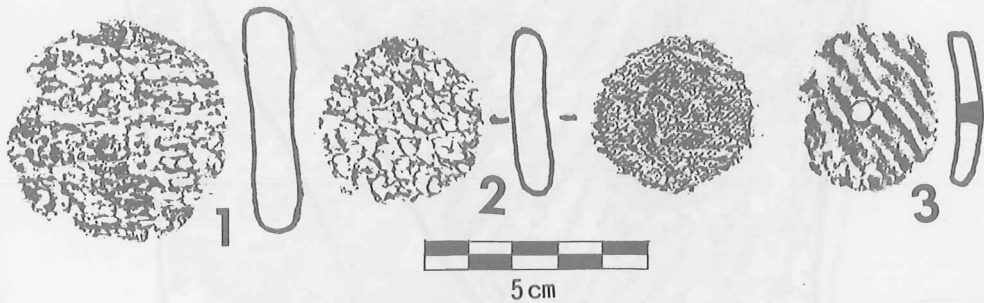
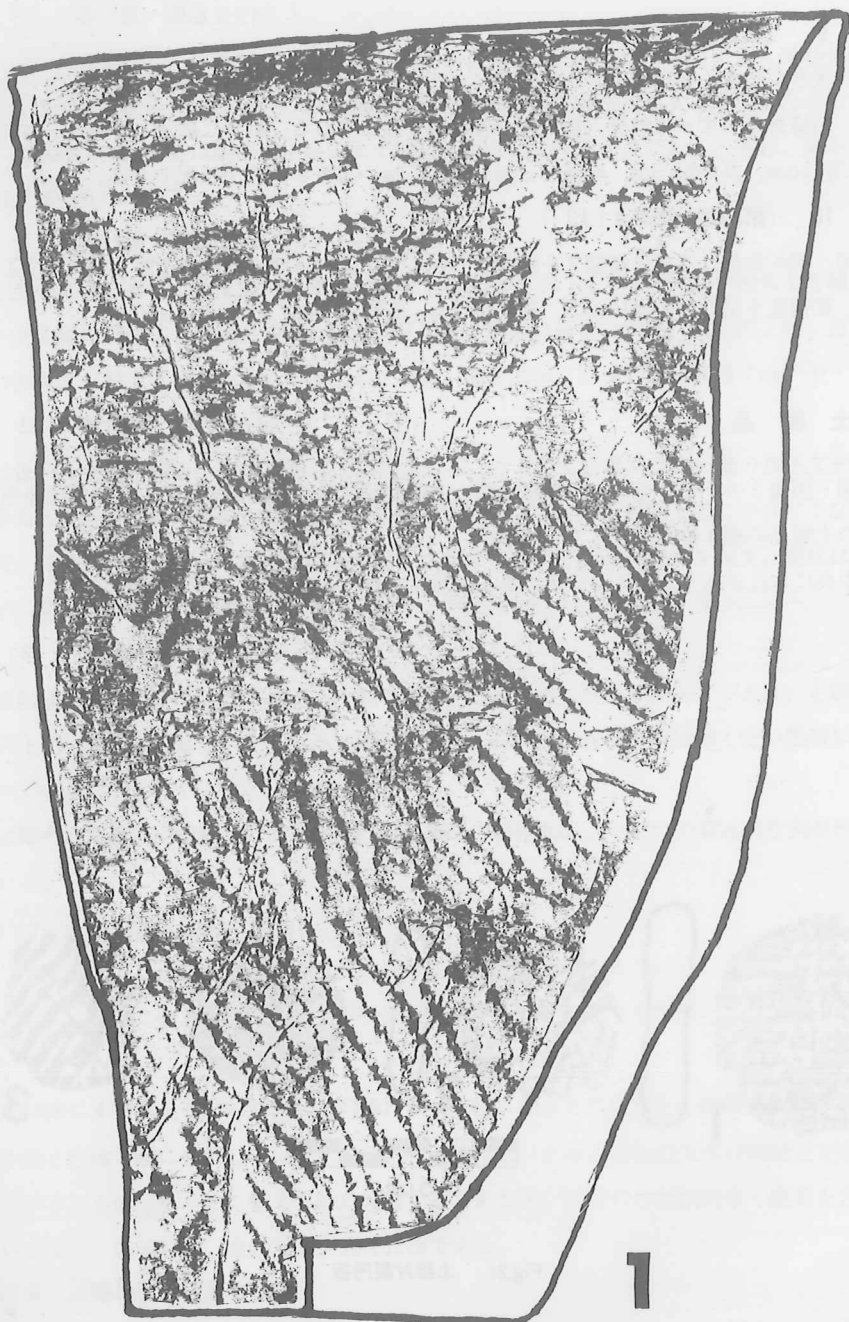
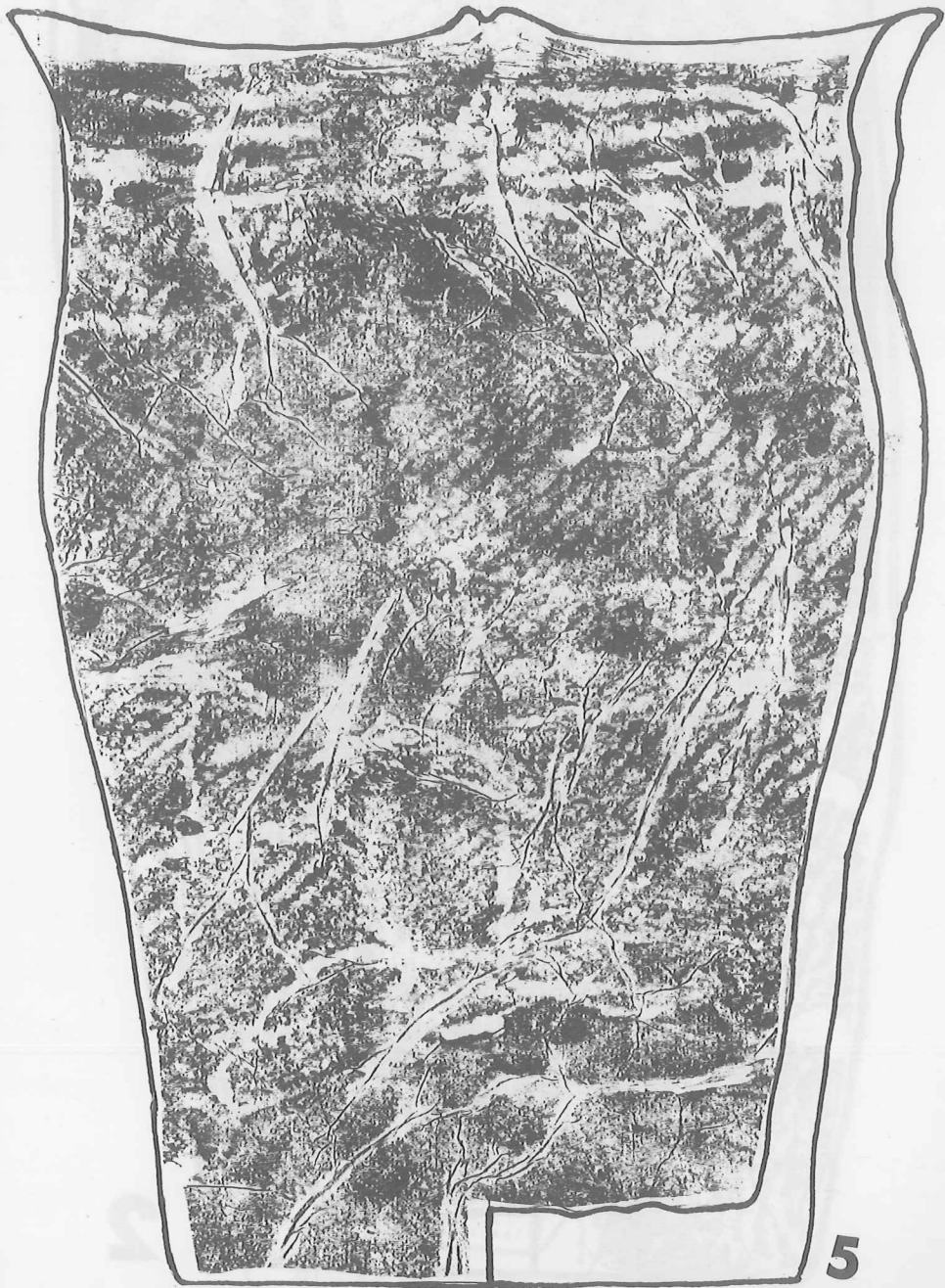


Fig21 土器片製円板



0  5 cm

Fig 11 復原土器 1 (Bトレンチ出土)



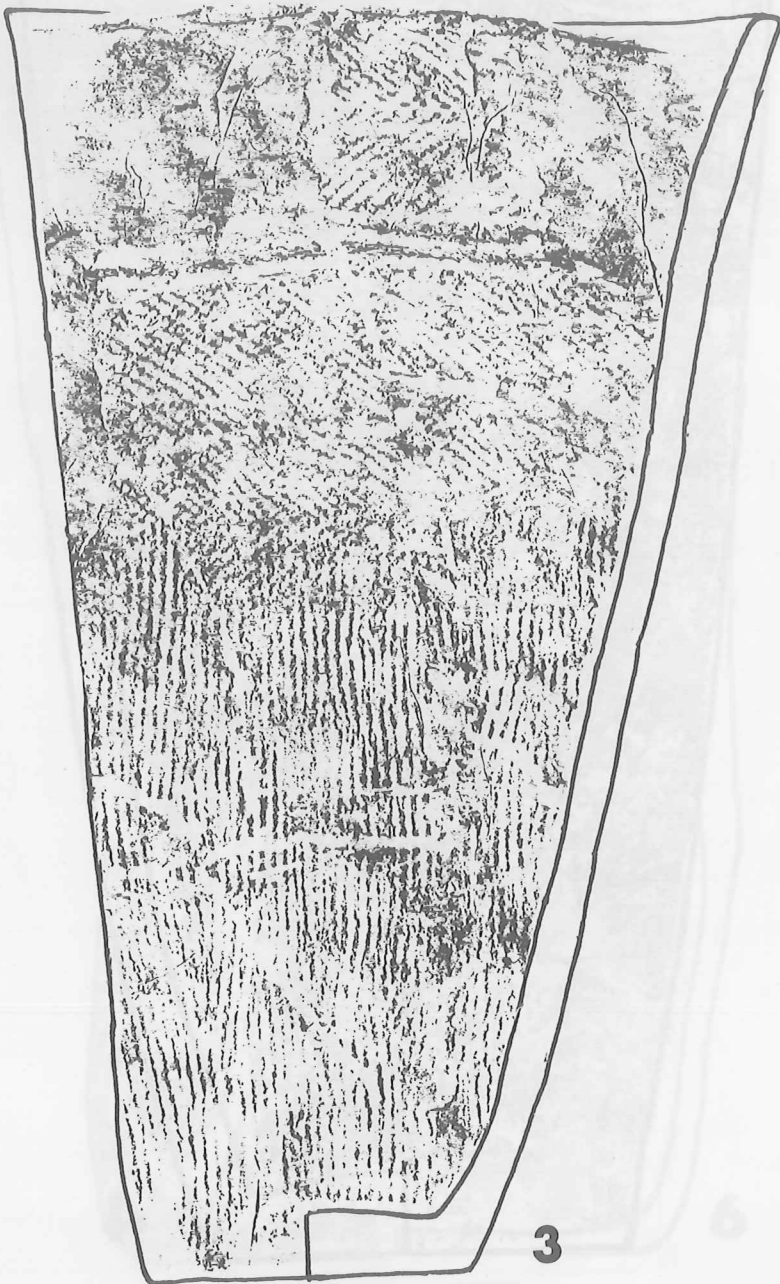
5 cm

Fig 12 複原土器25 (Aトレンチ出土)



5 cm

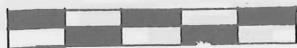
Fig13 復原土器12



5 cm

Fig 14 復原土器 3 (Bトレンチ出土)





5 cm

Fig15 復原土器4 (Aトレンチ出土)

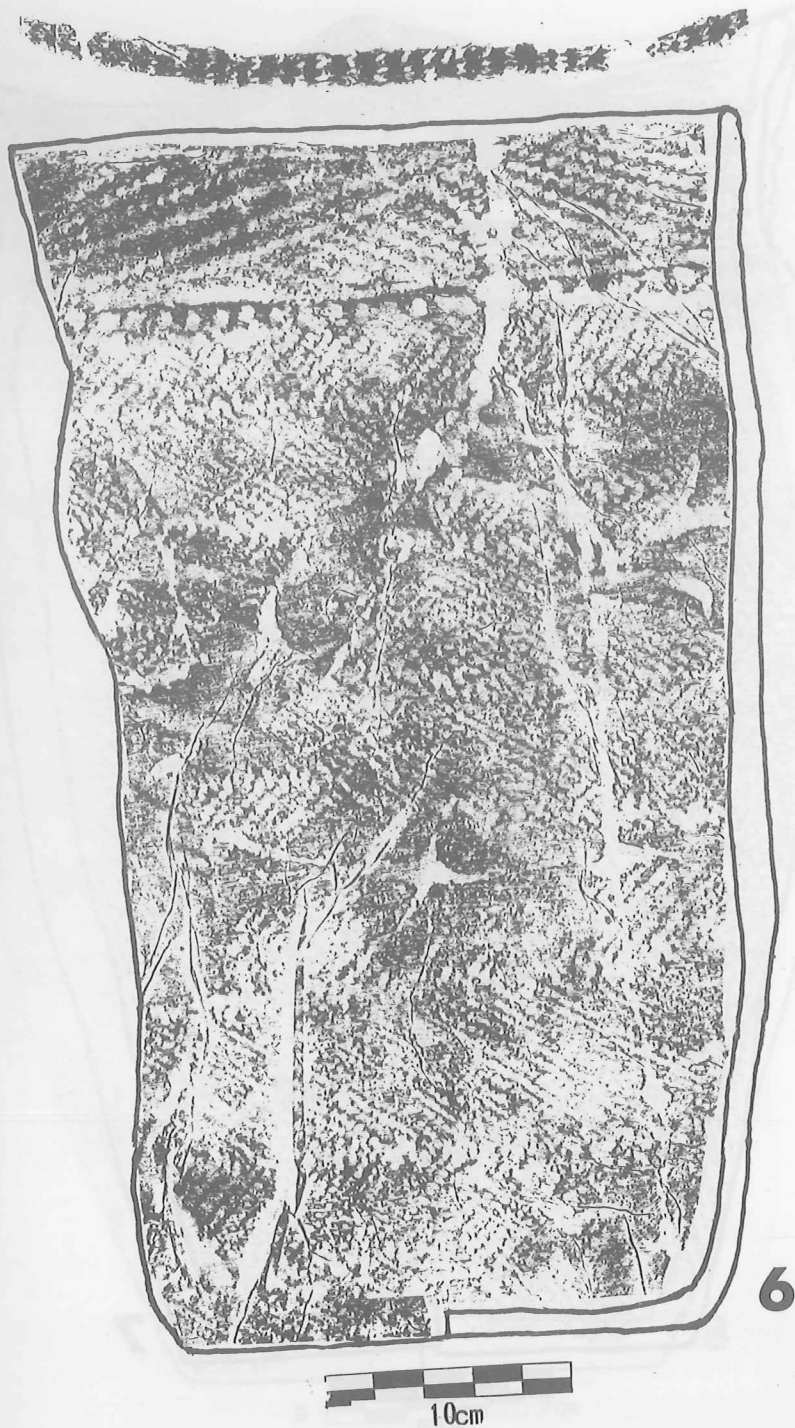


Fig 16 復原土器 6

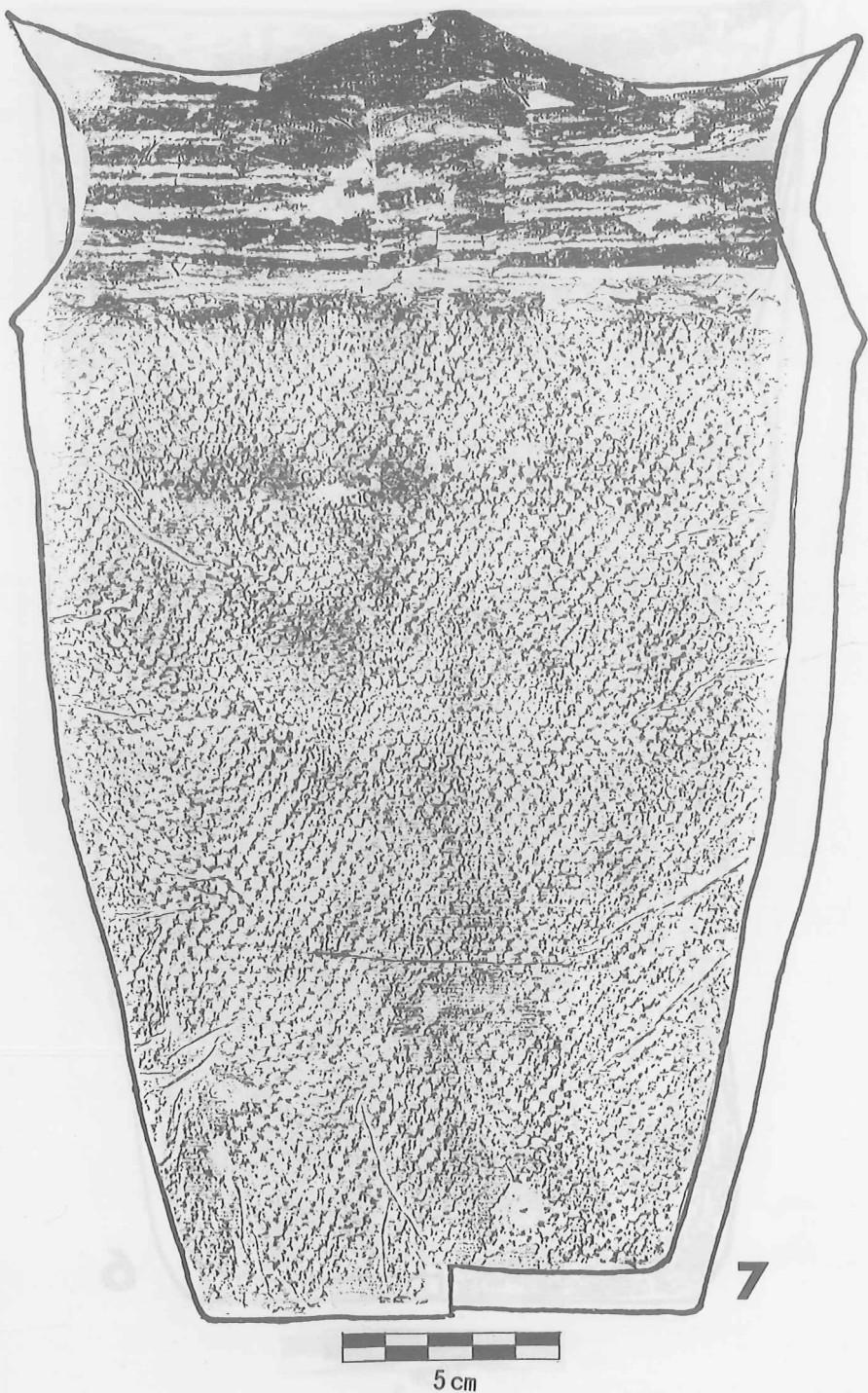
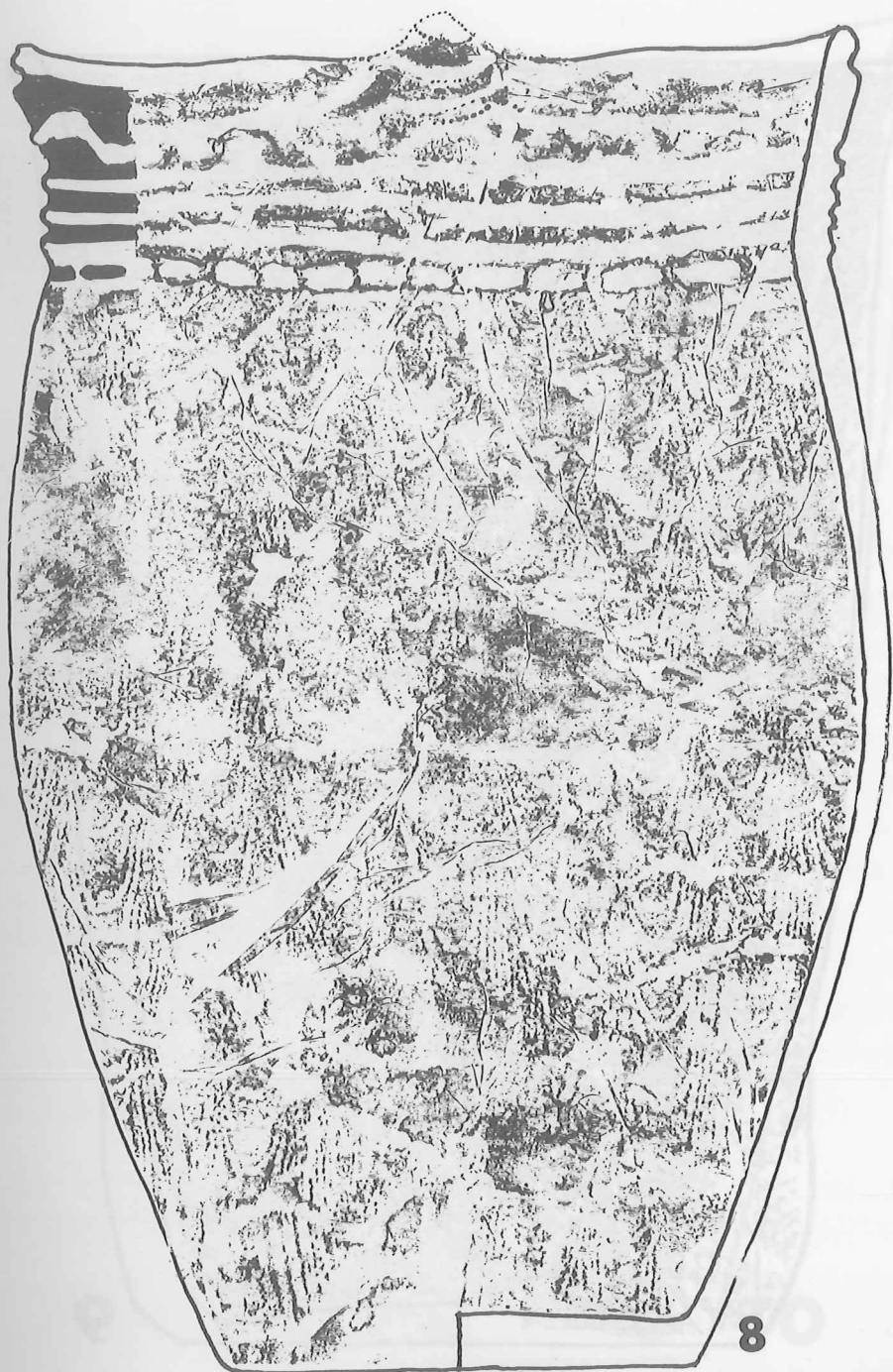


Fig 17 複原土器 7



0 5cm

Fig18 復原土器 8 (Fトレンチ出土)

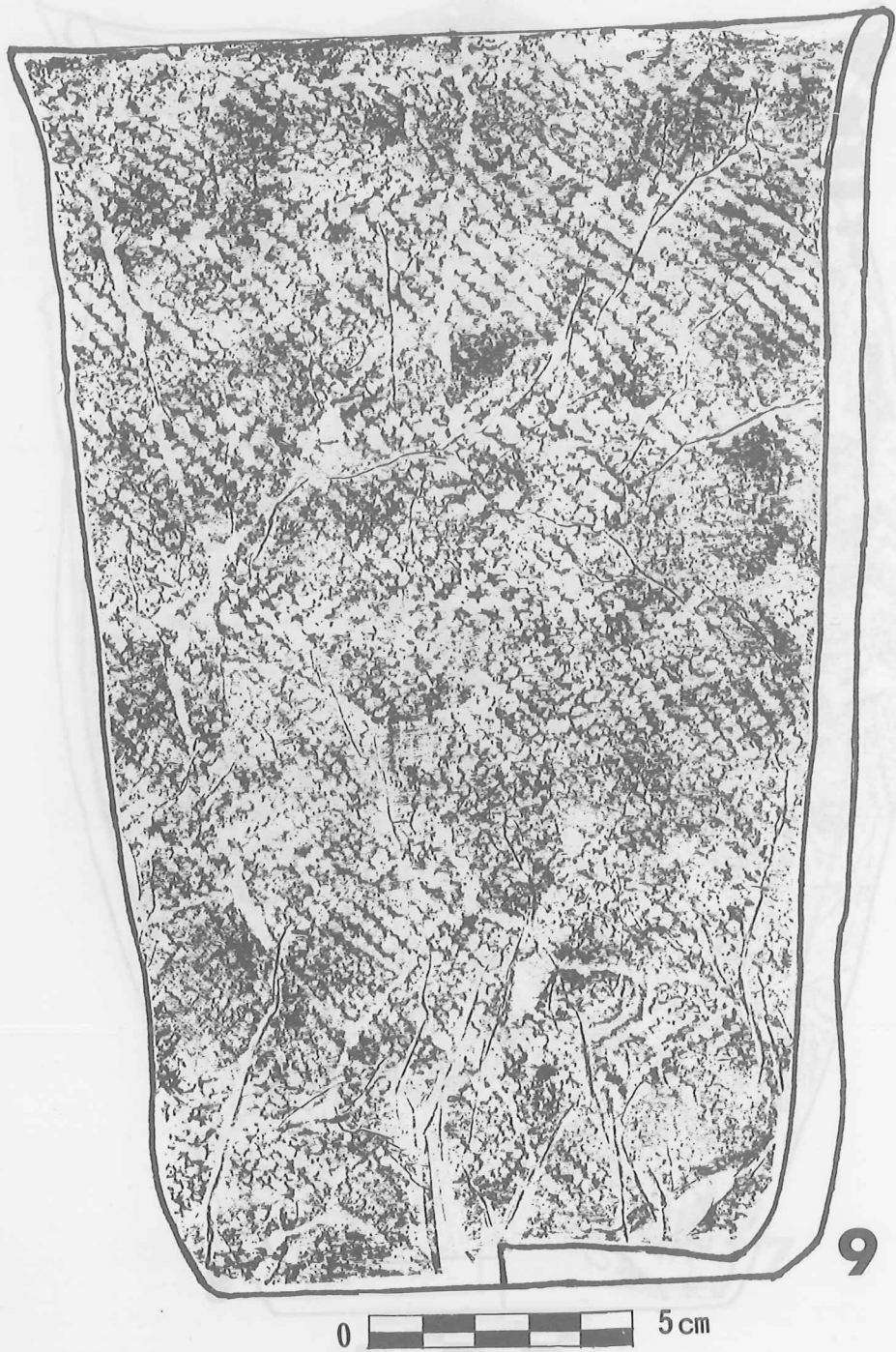
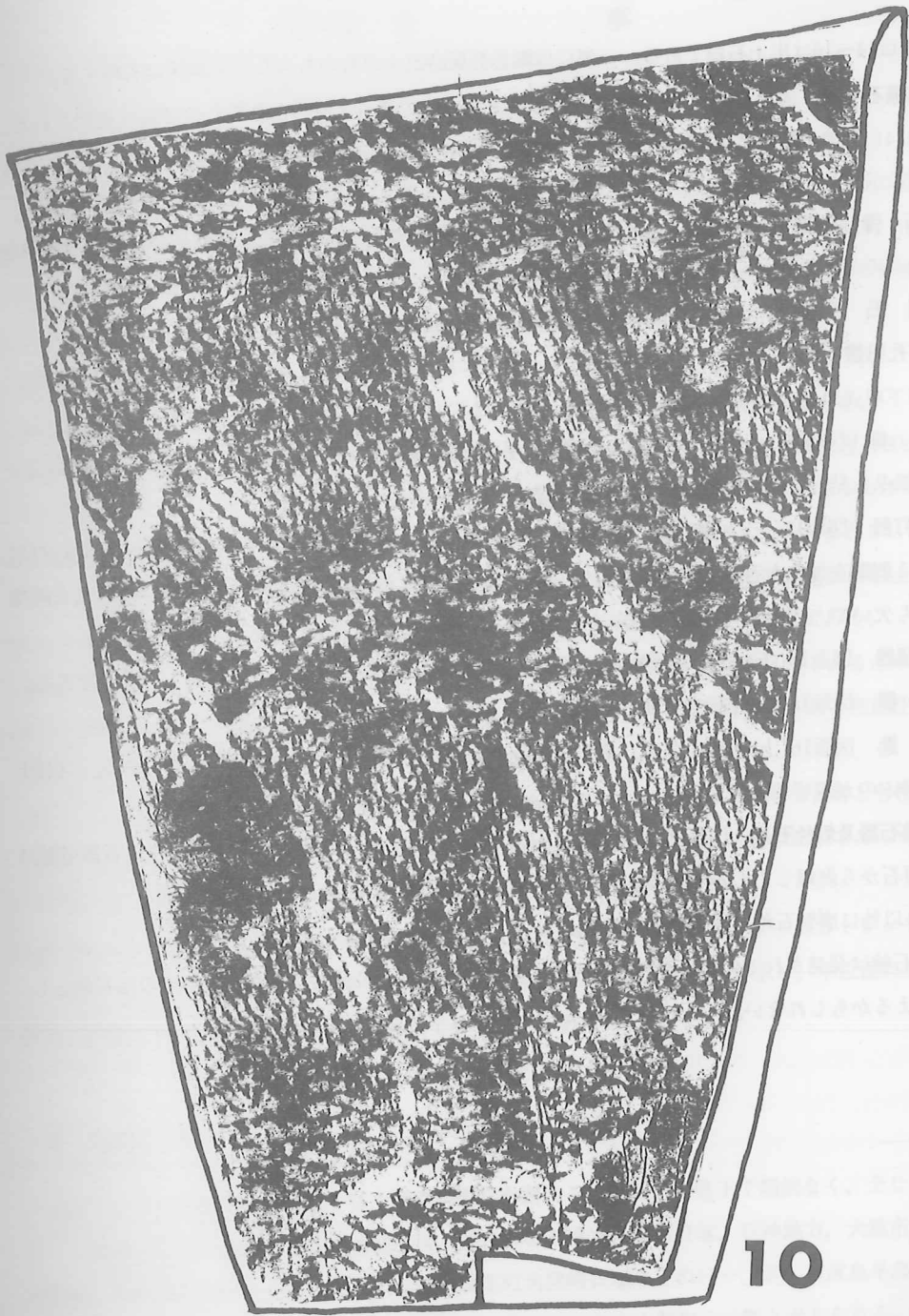


Fig 19 復原土器 9 (Dトレンテ出土)



0  5cm

Fig 20 復原土器10 (Gトレンチ出土)

## II 石器・石製品

図版14～16は出土石器である。一部には緊急発掘時出土のものも含む。実測図は省略する。

**河原石石器** 河原石で大型扁平なものや、片手に握って適当な道具となるものは盛に利用された。図版14(上)の下段左2個を除いてすべて河原石石器である。実測図の一部は桂高校社会部による第25図に示されている。

**石 弾 (投弾)** 図版14(上)下段の左2個は、投弾と考えられている。投弾具に装備して使用されたものであろう。

**凹 石** 図版14(下)上段右端1個、下段右端2個は凹石である。

**有孔円盤** 図版14(下)下段右端は扁平な石を更に磨き円形に整え、中央に一孔をあけたもので、円筒下層式以前の特徴的な石器とされる。

**石 錘** 図版15 左列・中央列の6個は扁平河原石の両端に打欠きえぐりを入れて、この両えぐりに撚糸を結んで網のおもりとしたのである。

**敲打器** 図版15(上)右列2個。扁平で長い形の河原石の両面を少し磨いて、長い辺の一方に打撃による剥離を加えた石器で、普通敲打器(たゝき石)と言われる。2個のうち1個はその左右両端を打ち欠いて、えぐりを入れてある。

**尖頭器** 図版15(下)上段、下段右端2個。打剝によって先端のとがった利器とした石器である。

**搔 器** 図版15(下)下段左3個。

**石 匙** 図版16(上)上段右3個、第2、3段のすべて。縦型のものと横型のものである。(石小刀と呼ぶのが適切であろう。)

**石核石器及剝片石器** 図版16(下)上段右3個、中段右端1個は石核で、以下の剝片(石器半製品等を原石から剝離した石器)である。剝片石器の数量は多量にのぼる。

これ以外に磨製石斧破片と磨石がある。

他に石槍は発見されていないが当然伴うはずの石器である。尖頭器のうち小型のものは石鏃として取扱えるかもしれない。

## 1 遺跡について

遺跡は芋掘沢にそい、縄文前期前半から後半、同中期の初頭の各期にわたっているが、その各時期の遺物全部がそろっているわけではない。ある期のごくわずかの遺物が発見される現象は、付近にその期の遺跡が存在する可能性を物語っているが、蝕剝や後世開拓により失なわれたものが多いようである。しかしながら、なお多くの遺物埋蔵地の存在が推定される。

包含層について簡単にふれておきたい。

第22図は、Aトレンチ北壁と、これに直交するDトレンチ西壁の土層断面実測図である。

第1層はAトレンチからEトレンチ南拡張区にかけて、薄茶色からセピア色を呈し、厚さ30cmから50cmである。Eトレンチ南側にレンズ状の薄茶色と茶色の薄層をはさんでいる。Eトレンチの4、5層は黄褐色土で、Aトレンチ拡張区にもこのような土層がある。同一層であろう。Eトレンチではこの下に黒土層が重なり、南側ではや、うすい黄土層のレンズが重なり、以下無遺物の黒土層が厚い。この黒土層は茂屋下岱、赤川などの諸遺跡にもあり、有機性が濃く厚く湿潤である。

茂屋下岱遺跡でも、赤川遺跡でも、本遺跡でも、この黒土層は春夏を通じ滞水性であるため、発掘されなかったが、今後発掘する必要がある。無遺物層と書いたが、遺物の発見される可能性があるからである。

Eトレンチ東側のうすい黄土層とその上の黒土層は粘質であるが、その上位層は各層とも粘性なく砂質である。このEトレンチの8層は、あるいは竪穴、ないし平地式生活址の貼床であったかもしれないが、確実なことはわからない。

Bトレンチの最上表は、餅田平坦地面から1.5mほど下位で、D、EトレンチはBトレンチからさらに2m低い中位面に相当している。累層は谷（芋掘沢）に向って傾斜を示し、中位面に当る堆積土の傾斜も下位の火砕流の地形と一致しているようである。

## 2 遺物について

土器について概観すれば、第1群土器の条痕文土器のこの種は、本県下で類例なく、全じく縄文ないし撚糸文土器の内面に条痕ある種類は、青森県金木地方、浮橋貝塚、石神地方、大館市福館、橋桁野、北秋田郡田代町茂屋下岱、南秋田郡美里町角間崎貝塚などのほか、北 道渡島半島南部の根川地方などにわたる文化圏内に、近頃明らかにされつゝある土器群の仲間と考えられる。即ち筆者が茂屋下岱式土器群として報告した土器に属する。



口縁部に指頭押圧文があり、1ないし2、3本の貼付隆帯をめぐらした、従来の円筒下b式と類似のグループの編年位置をめぐっては、良好な遺跡の発掘による層位確認の追試による以外解決の方法を知らないが、内面の条痕、貼付隆帯、指頭押圧文、爪型文等は円筒下a、b式を含めて円筒土器分布圏の縄文前期後半の型式より以前に発生し、降って円筒下a式、所によっては円筒下b式にまで及ぶ継続的な手法である可能性のほか、円筒下a、b両式を区別することについての再検討さえ考慮される情勢が生じ、この期文化の発生伝播、分布の複雑性を物語る。

しかしながら口縁部の指頭押圧凹文ある土器の器形はしばしば胴中央部のふくらむ、いわゆる円筒形でないことと、それが例えば口径40cm、高さ60cmに達するような大土器さえ稀でない点と、青森県立史料館所蔵の同県田子町出土のような竹管コンパス文や輪つき縄文を施文の大型土器にも頸部の押文とともに存在することで、円筒式なる名称が案外不便なものであると同時に、もし円筒形に限るならば、その時期は限定され、やはり、この種大型の土器を含む一群の土器群を、縄文前期前半の型式であるとする仮説の拠りどころを強める。

第5図の第2群のような、口縁部文様帯が構成されない仲間の、1～28までの撚糸文や縄文の土器も、お、よそ茂屋下岱式のグループに属する。

第6図第2群の6、のような土器を始原型とし、第3群のうち胴体の縄文の地文が、口縁上部から施文され、その一部が磨消されて、はっきり口縁部の文様帯が独立しない土器は円筒下a式であろうし、遂に隆帯を設けて、口文様を区別する段階に入る前に、第7図12のような土器が現われ、第7図14～16、17のような種類から18のような土器が発生する。円筒下層b式がこれに相当すると思われる。

第5群土器とした第8図1～7のような土器は一部円筒下b式もあろうが、大部分円筒下層c式と考えられる。

第9図2、5、8、14、15等のような口縁文様を示すものがあり、第8図8もふくめて円筒下層d式と考える。

一部第8図13、第9図3、12のような土器も円筒下c式であろう。

ついて、第8図17、第9図1の太い幅広い粘土の貼付紐上に、撚糸文を施文し、橋状の把手をつけた種類は、縄文時代中期に入り、円筒上層A式と呼ばれる土器である。

つぎは2期ほど間をおいて第9図17、18のような、や、細目の粘土紐を貼り、その紐上に撚糸文のない円筒上D式が出現する。この期または前後に大木6式や7a式文化の波及があったことを示す例がある。

体部文様（第10図）の大部分は縄文前期前半のもので、底部もまた同様である。

ここでわれわれの注意をひいた土器について付け加えたい。

第10図1の無文土器の器面は、へら状工具により縦に整型されている。このへら状の整型痕の土器は、文献による限り草創期の花輪台式によく似る。花輪台式は硬い焼成の土器であると云うが、

ここではわずか繊維を含む。

男鹿角間崎貝塚D地点の漂砂（C貝層表面砂層）中にも類似のものが一片採集されている。

また第6図1の縦位の撚糸文土器は、これもまた完全には同じではないようだが、文献写真では最も似ている土器が稲荷台式土器（草創期）である。

第4図1の条痕文土器もまた三戸式に見られるようである。

「秋田考古学」27に、笹原竹二氏が県南由利郡内から採集した土器片を、学会に出席された伊東信雄教授に託し、その方面に明るい研究者に鑑定してもらい、井草（大丸）式であると言われた旨の記載があった。

また早期に降って子母口式や野島式、大寺式のほか下北半島の早稲田1類や3類土器にも無文土器が見られる。

この事情とは直接に関係ないが、これら異質の、この地方に見ることのない土器が、円下式土器包含の下部に出土することは、上層の周知の土器の包含層下に2、3の不明の土器の包含層が、ごく狭小レンズ状か、鱗片状に残存していたことを意味するのではないかと推察するだけである。発掘の過程で、こうした層を識別することは困難な場合が多い。記録にも層位不詳のことが多い。

今後こうした古い型式の小數異種の土器については留意する必要がある。

石器について略記すれば、石材は付近第3系の硅化した堆積岩や火成岩を用い、特に河原石の多いが目立つ。図版に示したもののほか簡単な作りの片面加工の尖頭器や削器も実に多く、また単に硬質であることを利用したと思われる、白めのうの小片が多かった。白めのうを打剝したり磨研したりする工作は、ここでも発達をみせていない。

石錘のそろっている点は、付近に発達する河川での魚撈に関連するが、石鏃、磨製の石斧等の発見も極めて少なく、この遺物包含地点が生活址というよりむしろ廃物捨場、ないし一部が土器等の置場として利用されたことを物語るかもしれない。なお打剝による石器のていねいな作りのものが見られないのは円下a式期等の古い方の特色であるようだ。円下a式の石器はよく知られていないし、円下b式になると、打製石器が精巧になると云われる。

遺構として精製の円下d式土器〔第17図・図版口絵・図版4（下）〕は上に長い河原石の蓋をし、死産児、または死亡した新産児、早産の胎児の死体を埋葬したカメ棺（深鉢棺）と見做される。

他の遺構は、発掘が完結に至らなかったためもあり発見されなかったが、竪穴等はおそらくこのせまい斜面では存在しなかったろう。たゞ石囲いのない焚火跡が2、3発見されている。

## 第5章 総括

芋掘沢遺跡は大館市中心部より近距離にあり、米代川と長木川の間にはさまれた河岸段丘を浸蝕した小さい沢にのぞむ。

この地に土器文化が発展したのは、縄文時代の早期末から前期前・後半の茂屋下岱式、円筒下層式、同中期の円筒上層式期の数時期であり、それは広域にわたって点在する。一部は自然的営力により、一部は開拓、工事等により近世に破壊されながら、今なおその多くを残している。

大館市教育委員会は、この一部に緊急行政発掘を実施したが、日程等の関係から、通常の技法をもって発掘することはできなかった。しかし、いくつかの未解決の問題点を含む好資料に恵まれた。

いま土器について若干の補足をするならば、第18図の土器8は、このような木目状燃糸文が円筒式土器に出現するのは、円下b式期とd式期であり、この期以外には見当たらないようである。しかしこの口縁部のような、浮彫状の文様で一種の波状文を作り出したり、沈線で破線文をつけたりする手法は、円筒土器の手法とは言えない。器形の胴ぶくれの感じからも、他文化からの波及によることは確かであろう。おそらく大木6式に近い土器と思われる。

あえてこれを報告例中に求めるならば、類似のものは宮城 周辺を拠点とする大木式各式の中に求め得るであろう。また第8図4、同20、同23も異質の文化のものであり、付録の第24図53、70、同76も同様である。

餅田家敷添の高清水清八、欣一両氏地内の遺跡に於ても、しばしばこの種異質の文化の土器片が出土する。仙台湾はおろか、遠く関東地方にその本源を求めなければならないが、いずれもその出土は内容的に未知の点が多い大館地方の縄文前期、中期遺跡の様相の一端を示している。

各種遺物の検討、研究は今後、目下行われている大館市史編さんの考古部門に引継がれ、解明のシステムの中に組み入れられるであろう。

## 謝辞

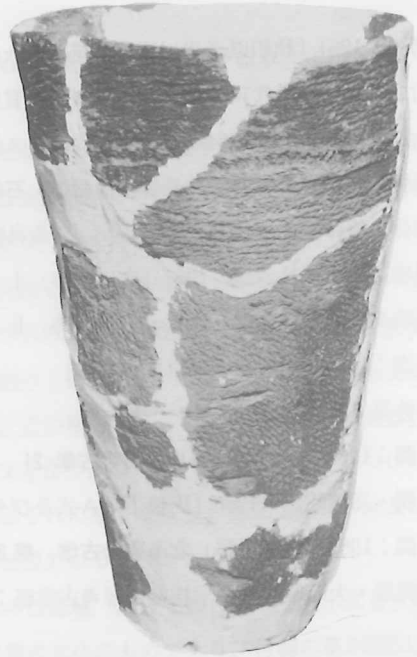
末筆であるが、餅田地域の発掘に当り、常に各種の便宜と好情を賜った高清水清八、清栄両氏、高清水欣一氏、発掘に当り援助された県立十和田高校大里勝蔵氏、同社会部生徒有志、田山 久氏 県立大館桂高校長の各位に厚く感謝の意を表するものである。

## 参 考 文 献

- 内藤博夫：1964「秋田県米代川流域の第4紀火山碎屑物と段丘地形」**地理学評論**  
白井哲之：1964「米代川流域における含浮石質段丘砂礫層に関する地形学的研究」**地理学評論**  
平山次郎・市川賢一：1964「1000年前のシラス洪水」**地質ニュース**  
江坂輝弥：1955「青森県女館貝塚発掘報告」**石器時代** No.2  
江坂輝弥・笹津備洋・西村正衛：1958「青森県蟹沢遺跡調査報告」**石器時代** No.5  
大館鳳鳴高等学校社会部：1967「赤川遺跡」I (単)  
大館鳳鳴高等学校社会部：1968「赤川遺跡」II (単)  
村越 潔：1968「浮橋貝塚」**岩木山** (単)  
江坂輝弥篇：1970「石神遺跡」(単)  
奥山 潤：1962「角間崎貝塚」**秋田考古学** 21  
奥山 潤・高橋昭悦：1968「円筒下層A式及びその直前の土器」**秋田考古学** 27  
奥山 潤：1969「福館遺跡」**北海道考古学** 第3輯  
奥山 潤篇・大館鳳鳴高等学校社会部考古学班：1971「茂屋下岱式土器群」(単)

## 調 査 団 の 編 成

|       |                     |        |
|-------|---------------------|--------|
| 調査団長  | 調査責任者               | 伊藤 経 雄 |
| 発掘担当者 | 奥山 潤                |        |
| 調査員   | 奥山 潤                |        |
| 全     | 田中 修 造 (大館桂高校)      |        |
| 調査補助員 | 佐藤 幸 英 (市役所市民課)     |        |
| 発掘員   | 県立大館桂高校社会部          | 4人     |
|       | 県立大館鳳鳴高校社会部         | 5人     |
| 援 助   | 県立十和田高校 大里勝蔵, 社会部生徒 | 2名     |
|       | 田山 久 (市立二中)         |        |
| 事務局   | 大館市教委社教課            |        |



PL 1 (上) 土器 1 (下) 土器 2

PL 2 (上) 土器 4 (下) 土器 3

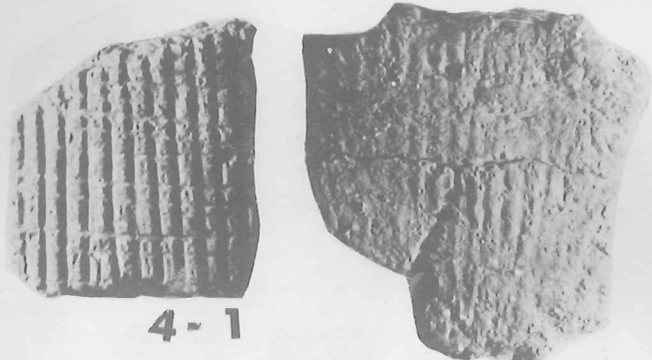


PL3 (上) 土器6 (下) 土器片製円板



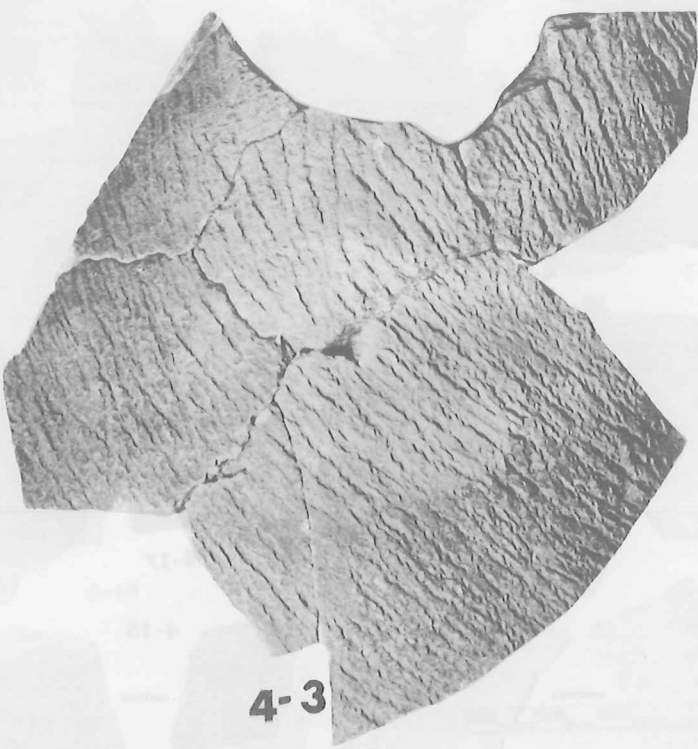
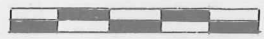
PL 4 (上) 土器10 (下) 土器 7

PL 5 (上) 土器 5 (下) 土器 8



4-1

4-2



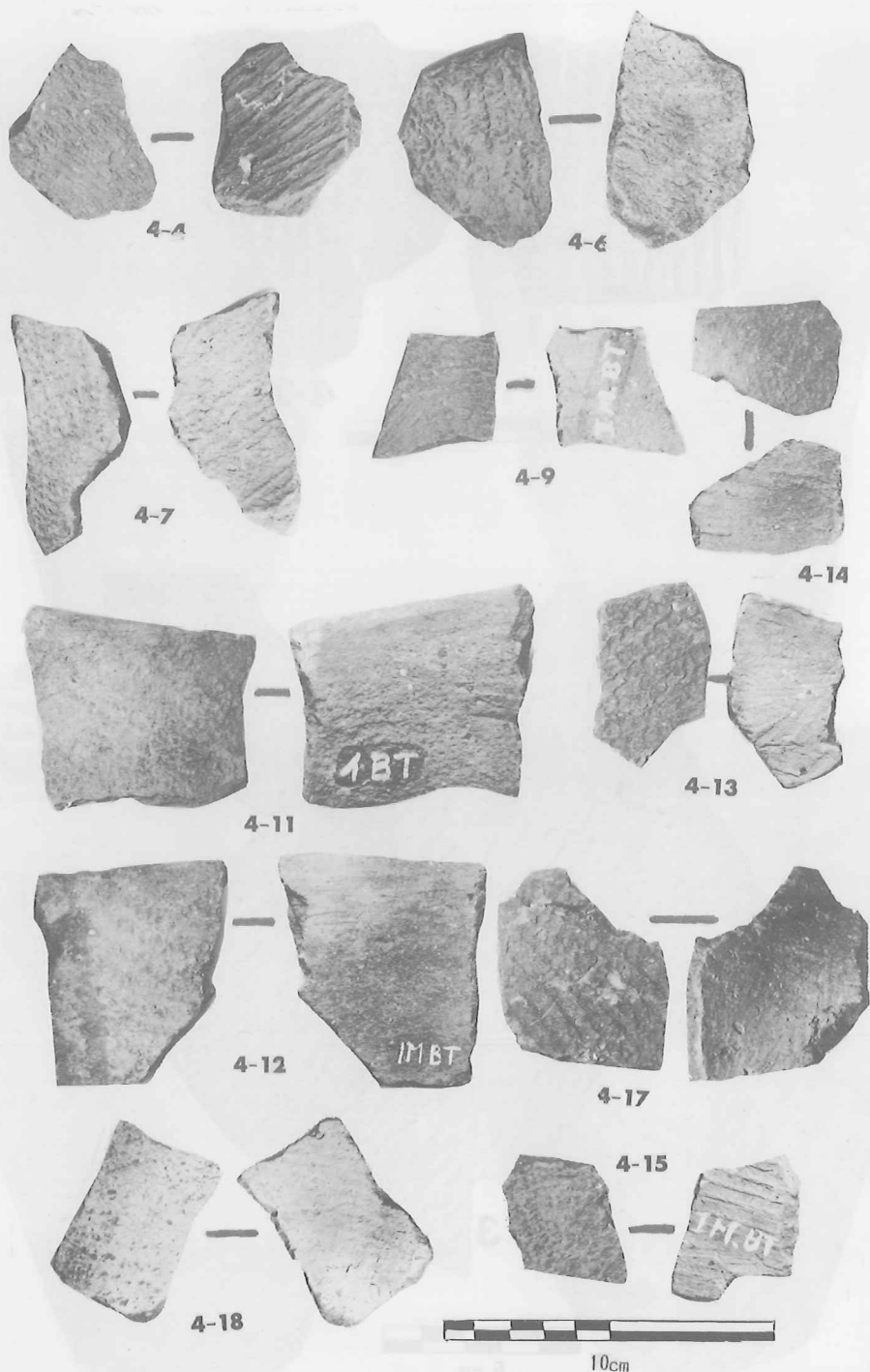
4-3



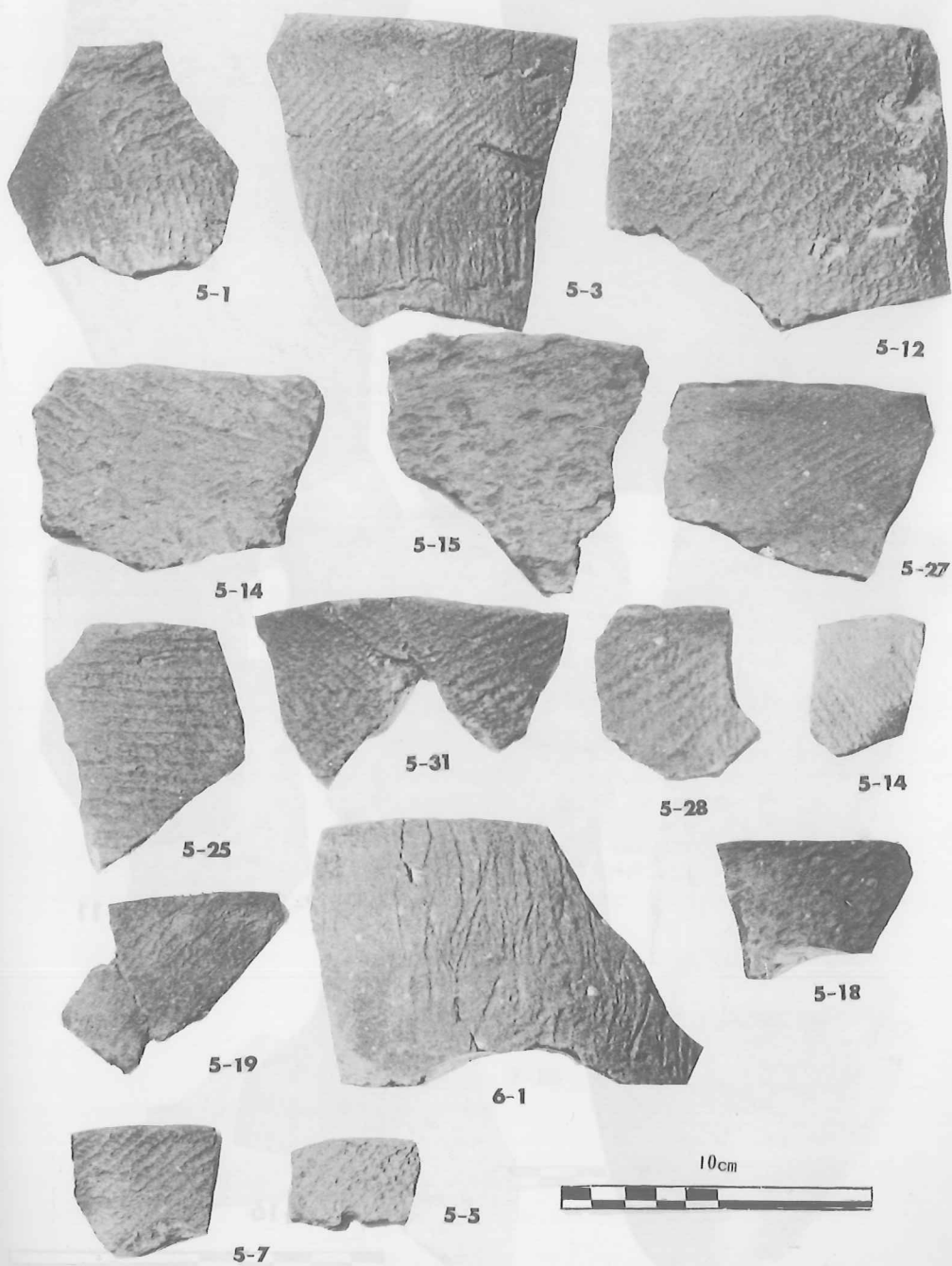
5 cm

PL 6 第1群土器(1)

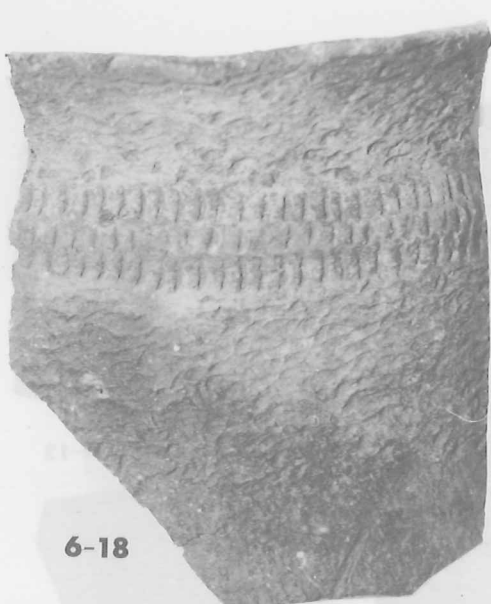




PL 7 第1群土器(2)



PL 8 第2群土器



6-18



7-1



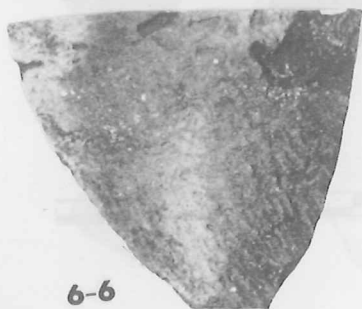
7-21



7-12



7-11



6-6

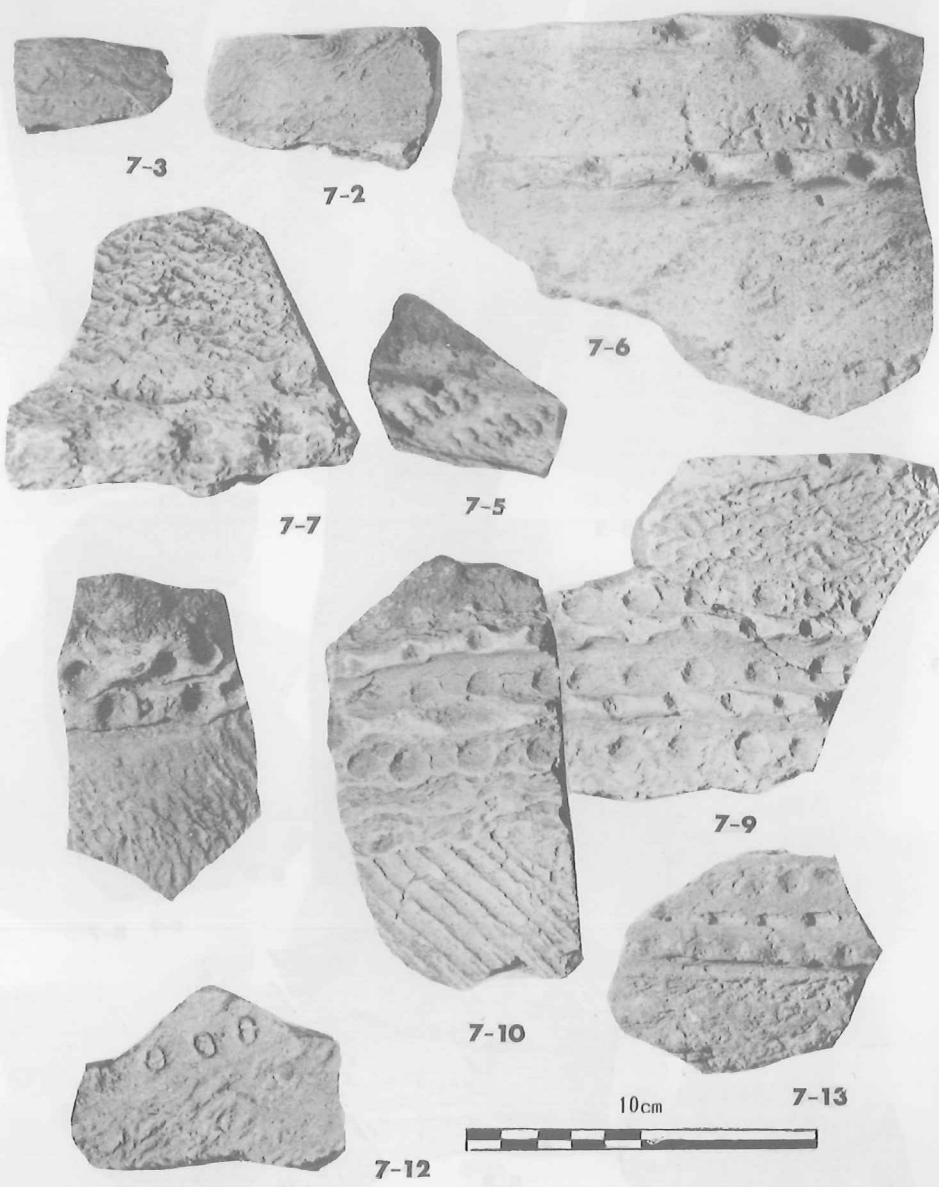


6-16

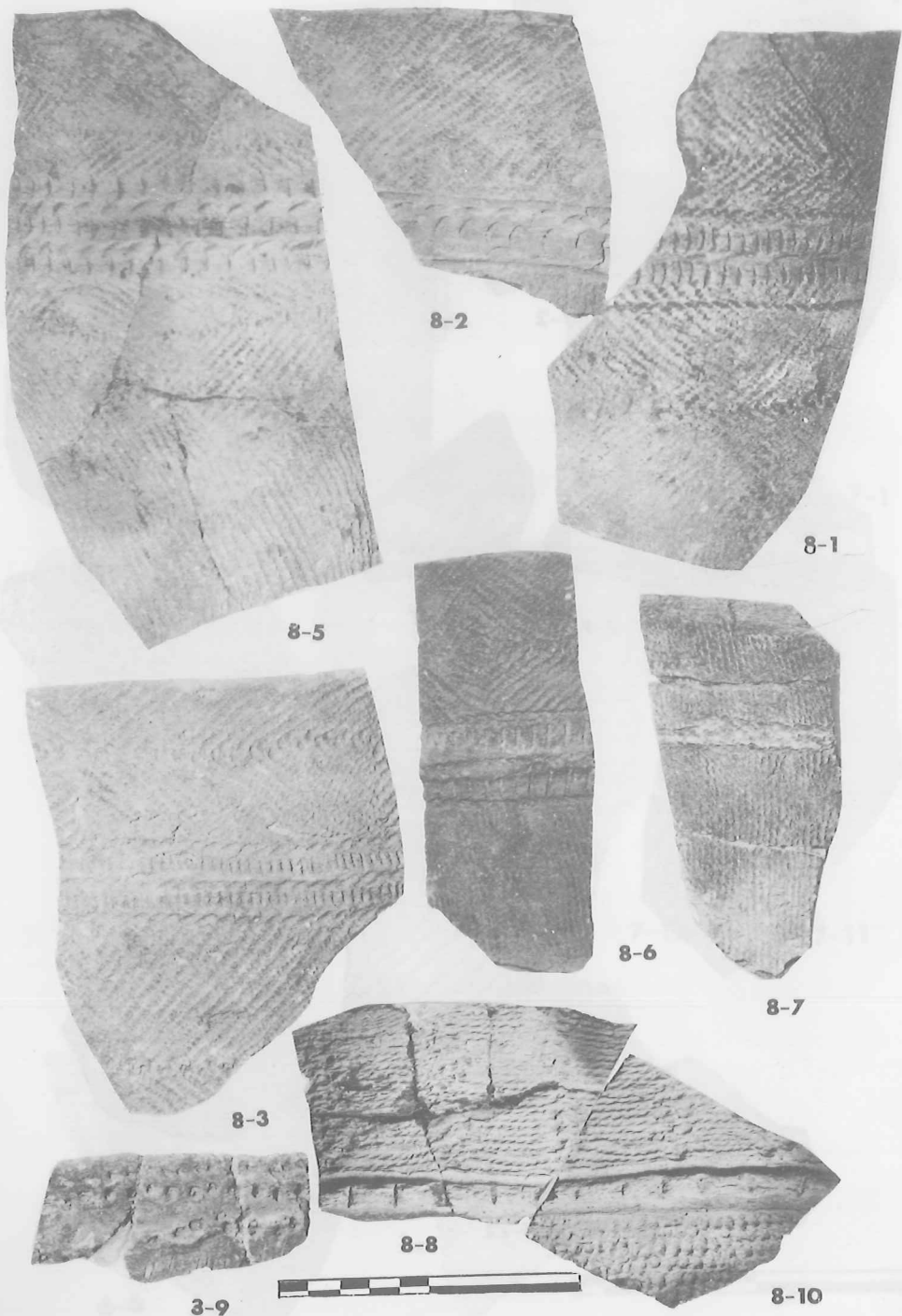


10cm

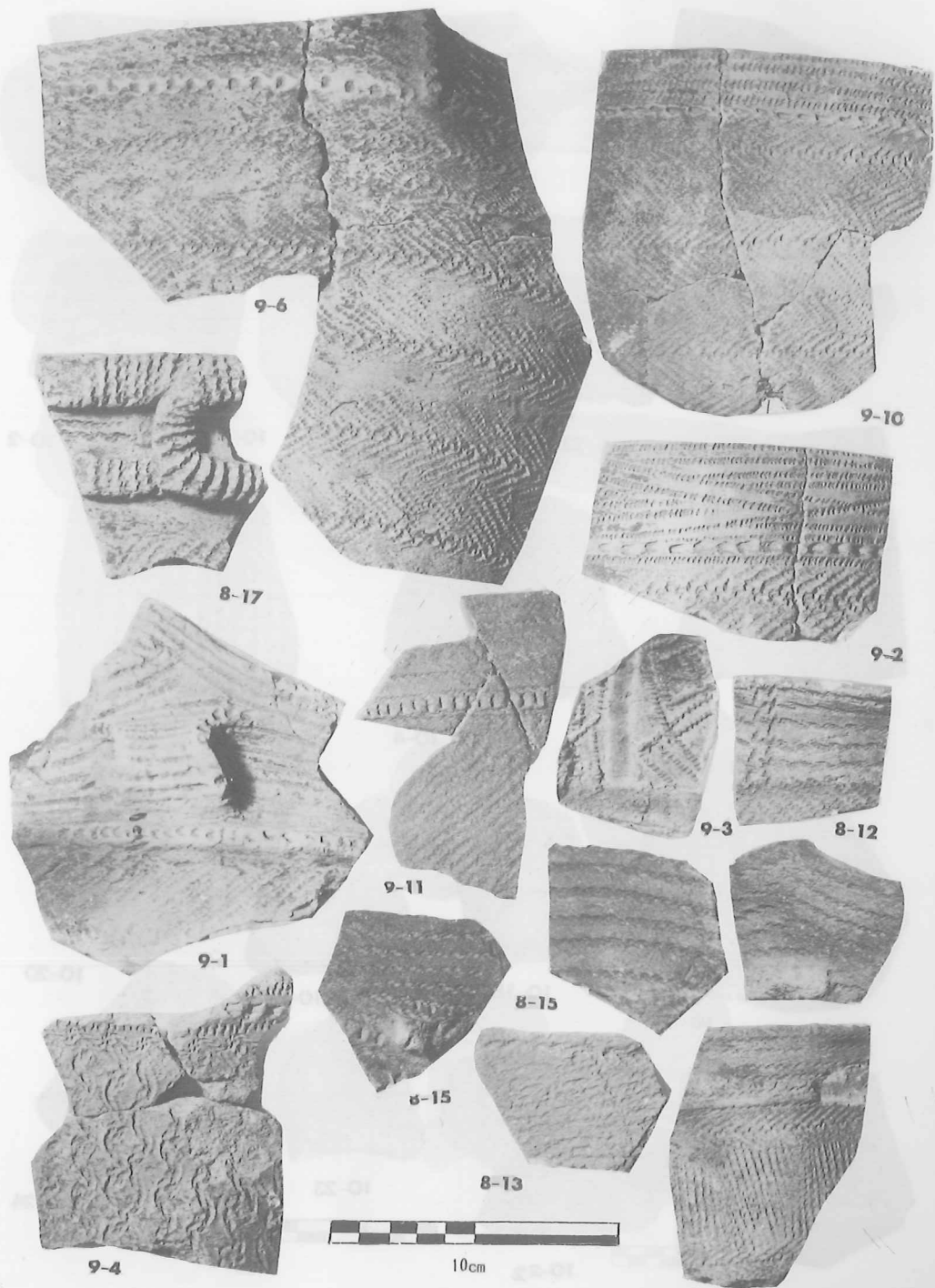
PL.9 第2, 第3群土器



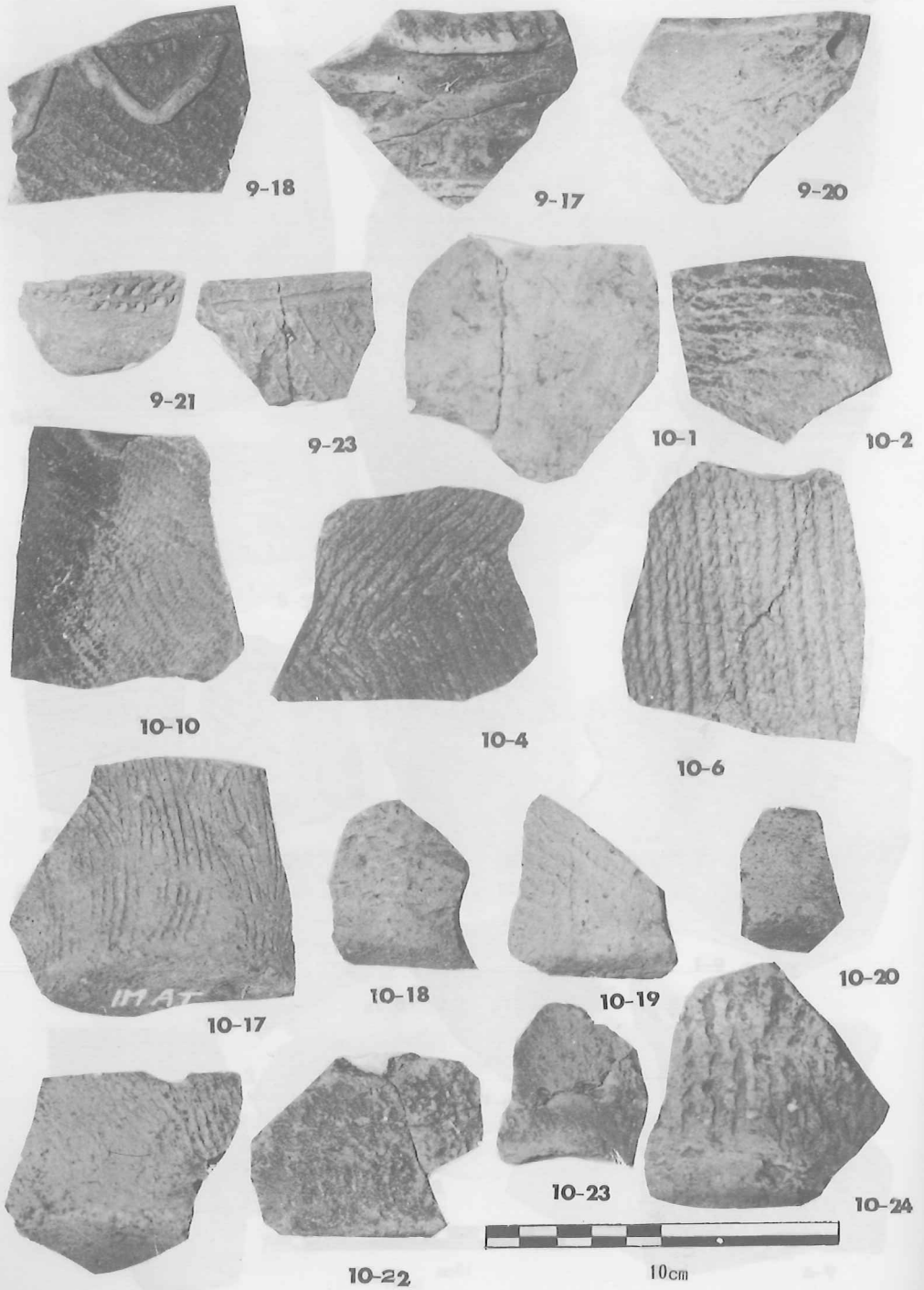
PL10 第4群土器



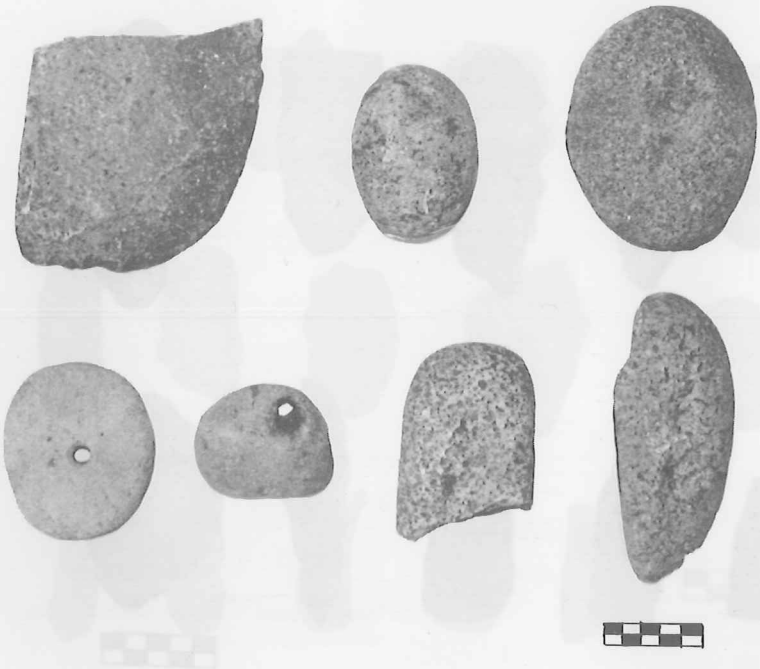
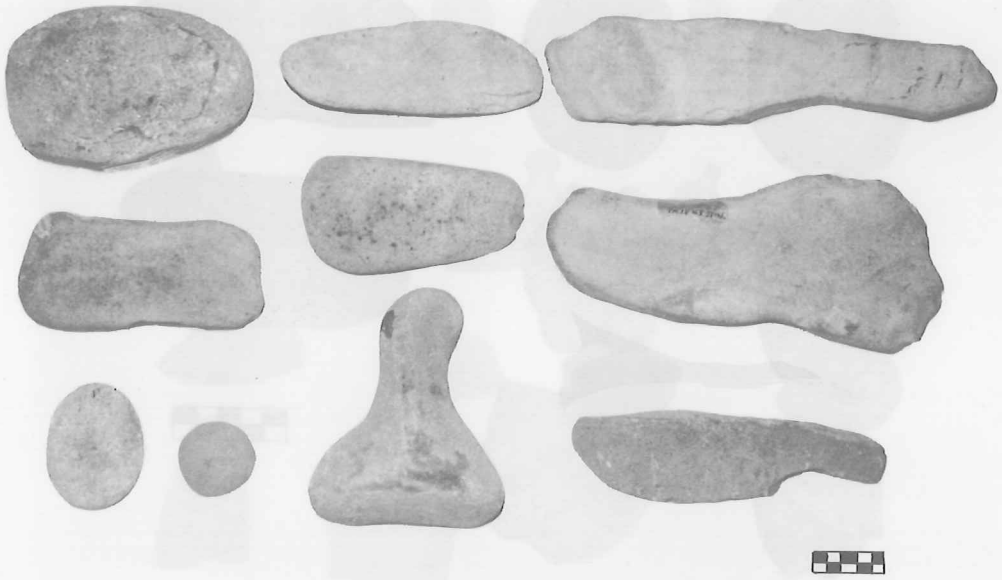
PL11 第9群土器



PL12 第6群土器



PL13 其他の土器・体部破片，底部

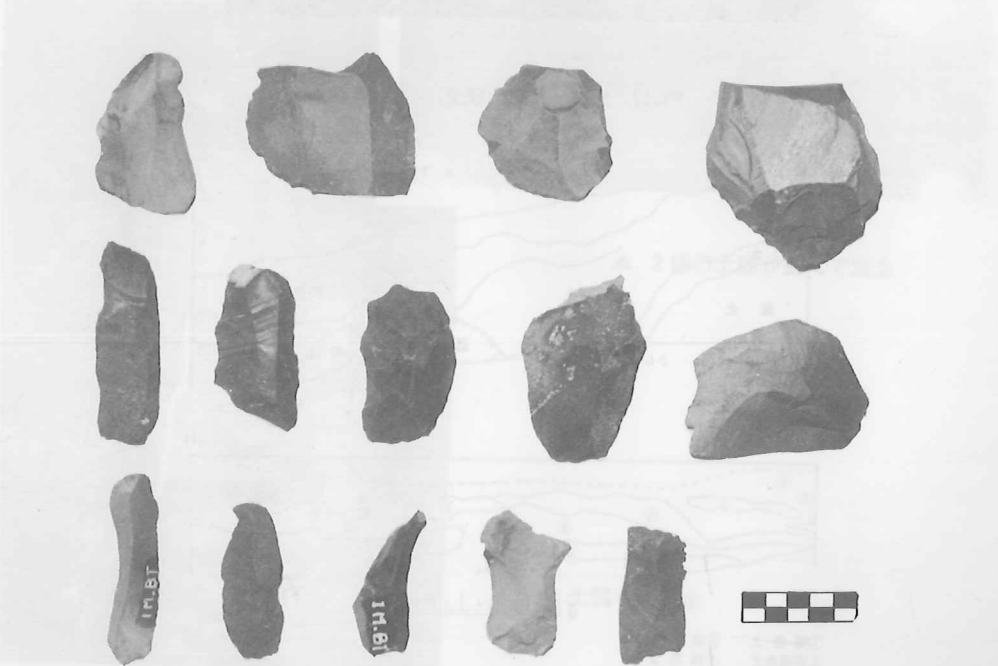
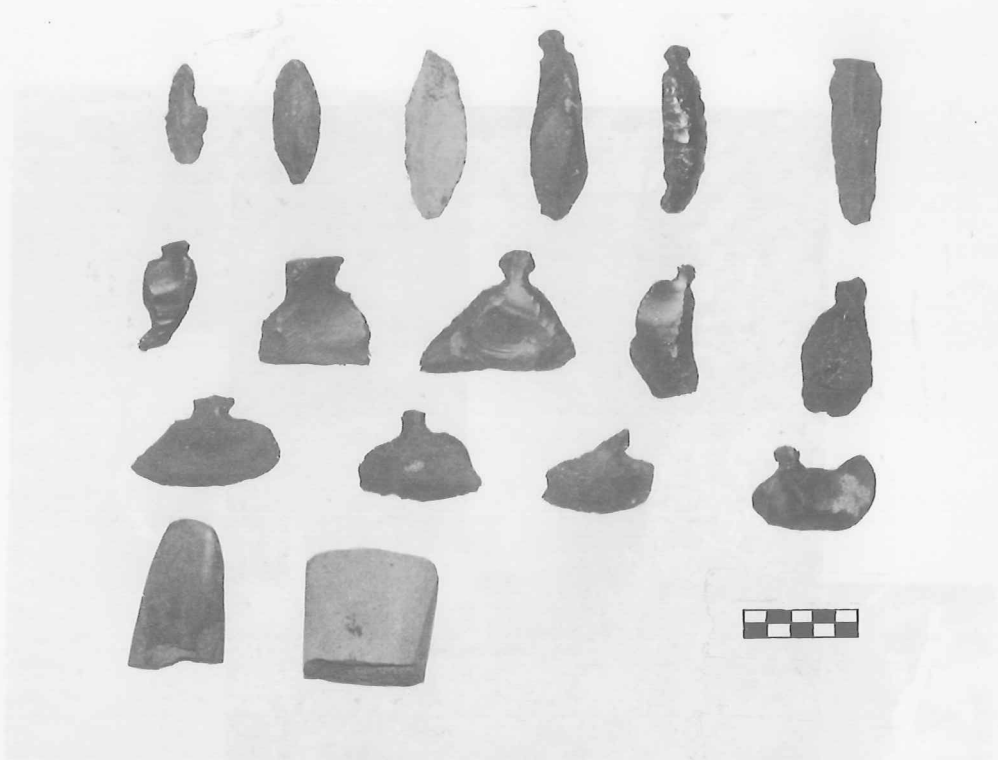


PL14 石器(1)





PL15 石器(2)



PL16 石 器(3)



PL17 土器 9 (出土状況)

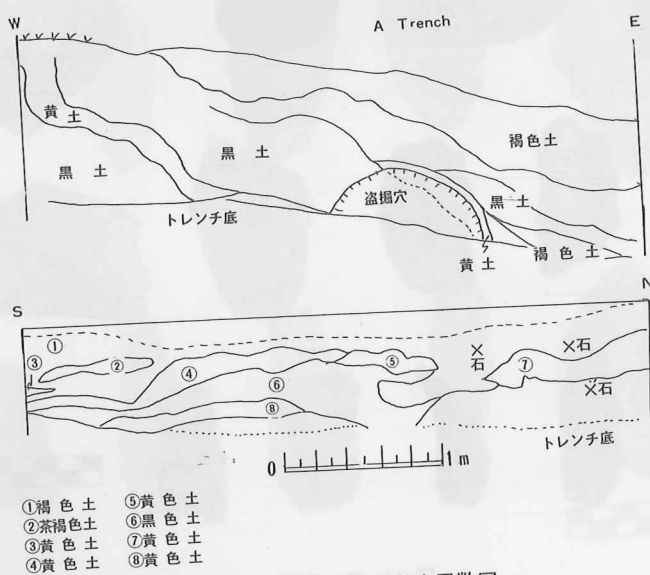
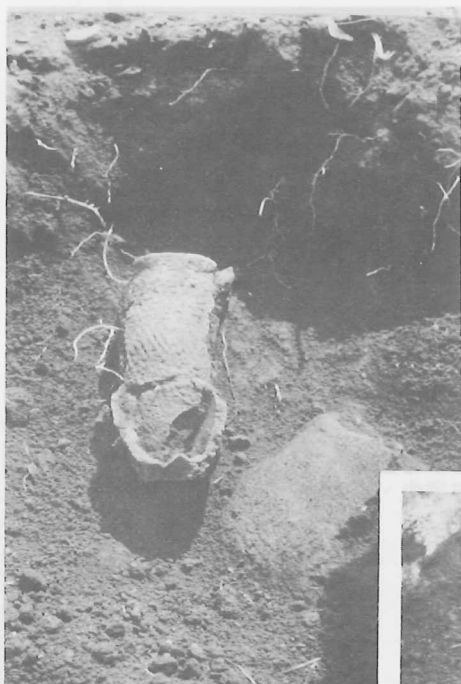


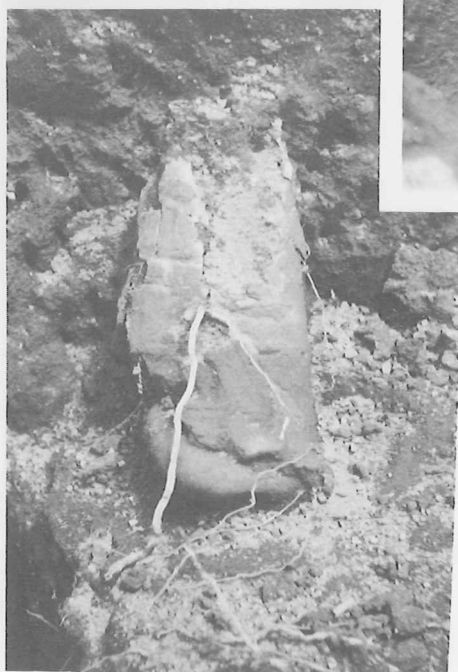
Fig 22 A, E トレンチ壁土層数図



◀ 土器 1 の出土



▲ 2 個の土器が並んで出土



◀ 土器 4 の出土

付 録

- I 7月15日芋掘沢緊急調査時の出土遺物
- II 餅田家敷添発掘のピット
- III この報告書を教材として扱われる  
市内小・中学校社会科担当の先生方に

## 付 録 I

### 7月15日芋掘沢緊急調査時の出土遺物

大館桂高等学校社会部

昭和45年7月15日、18日両日、工事により破かいされた遺跡の一部につき緊急発掘をした大館桂高等学校社会部考古学班の報告原稿を次に掲載する

#### 土 器〔第23, 24図〕

##### 第1層土器 口縁部

〔第1類土器〕 1～5, 21～23

文様帯は口唇部に刺突文が等間隔に施文されており、口縁部は横に平行の撚糸の押圧文が3条になり等間隔に施文されている。No.2～No.5, No.21もこれに類似する。No.4の口唇部は爪型文による。No.22は口唇には何もなく、口縁部には口縁に平行に2条の爪型文がある。その間を数条の撚糸の押圧文が施文されている。No.23は口唇部に円形刺突文様がある。

わずかな隆帯があり、その上に口唇部と同じ円形刺突文様が施文されている。

口唇部と隆帯の間にもう一つの円形刺突文様と繩の押圧文が飾られている。

〔第2類土器〕 6, 14, 18, 33

口唇部に撚糸の押圧による刻目状の文様がある。わずかな隆帯があり、その上に爪型文が施文されている。口唇の撚糸文と隆帯の爪型文の間を数条の等間隔の細い撚糸文が施文されている。

No.14は類似しているが、口縁部はわずかに外反し、口唇部から外面に撚糸文が右斜めに等間隔に押圧されている文様である。

No.33は口唇部に平行に数条の撚糸の押圧文があり、隆帯の上には、爪型文が施文されている。以下は羽状繩文である。

〔第3類土器〕 8～10

No.8は口唇部に1条の撚糸の押圧文がある。口縁の突起部は、突起を頂点として、山型に平行な2条の撚糸の押圧文が施文されている。

文様帯は口縁に平行な3条の撚糸の押圧文である。その下は、わずかな隆帯で、刺突文が等間隔に施文されている。

No.9, 10は、文様帯は、口縁に平行な3条の撚糸の押圧文がある。

〔第4類土器〕 7, 11~13, 19~20, 34

No.7は、口唇部には何もなく、文様帯は単斜縄文である。やや太めで、わずかに外反している。口縁部には、口縁に平行な撚糸文様が、2条施文されている。

No.11, 12, 13, 19, 20は羽状縄文である。No.12は突起部で、羽状縄文が向い合っている。No.13, 19は、縄の結び目がある。No.20は羽状縄文の上に、口縁に平行に、縄の押圧が2組1条で、3条施文されている。

## 体 部

〔第1類土器〕 24~25, 41~43

No.24は体部に太い撚糸による文様が施文されている。

No.25, 27, 41~43もこれに類似している。

〔第2類土器〕 26, 39, 40

No.26は体部に縄文による文様が施文されている。

No.39, 40は、これに類似している。ただ縄が細いか太いかによる区別である。

〔第3類土器〕 28~31, 44~49, 51

これはすべて、木目状撚糸文（単軸絡条体廻転文）による文様帯である。

No.30, 44, 49, 51は同数である。

〔第4類土器〕 32

これは櫛状工具による、ひっかき文様が施文されている。

〔第5類土器〕 35~38

No.35は、代表的な羽状縄文で、結び目がある。No.36は、類似しているが、縄の細いのを使用している。No.37には、結び目がない。

No.38は、結び目の代わりに、鎖のような文様が飾られている。

## 第2層土器 口縁部

〔第1類土器〕 15

太い撚糸の押圧が、右側に回りながら、施文されている。

〔第2類土器〕 16, 17

No.16は、口縁部に平行に、4条の縄の押圧文がある。隆帯があり、そこから撚糸文が出ている。

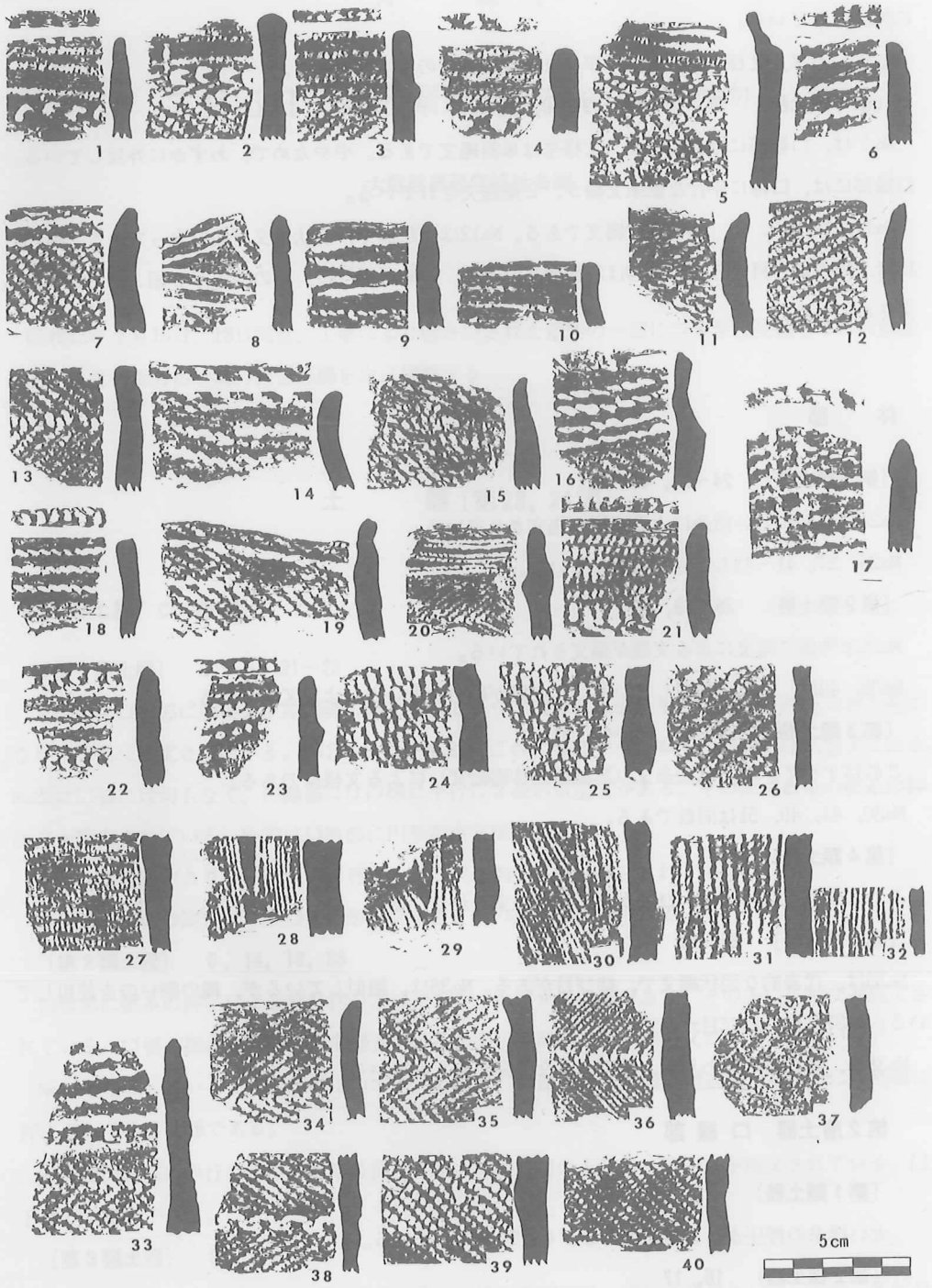


Fig 23 7月15日発掘土器(1)



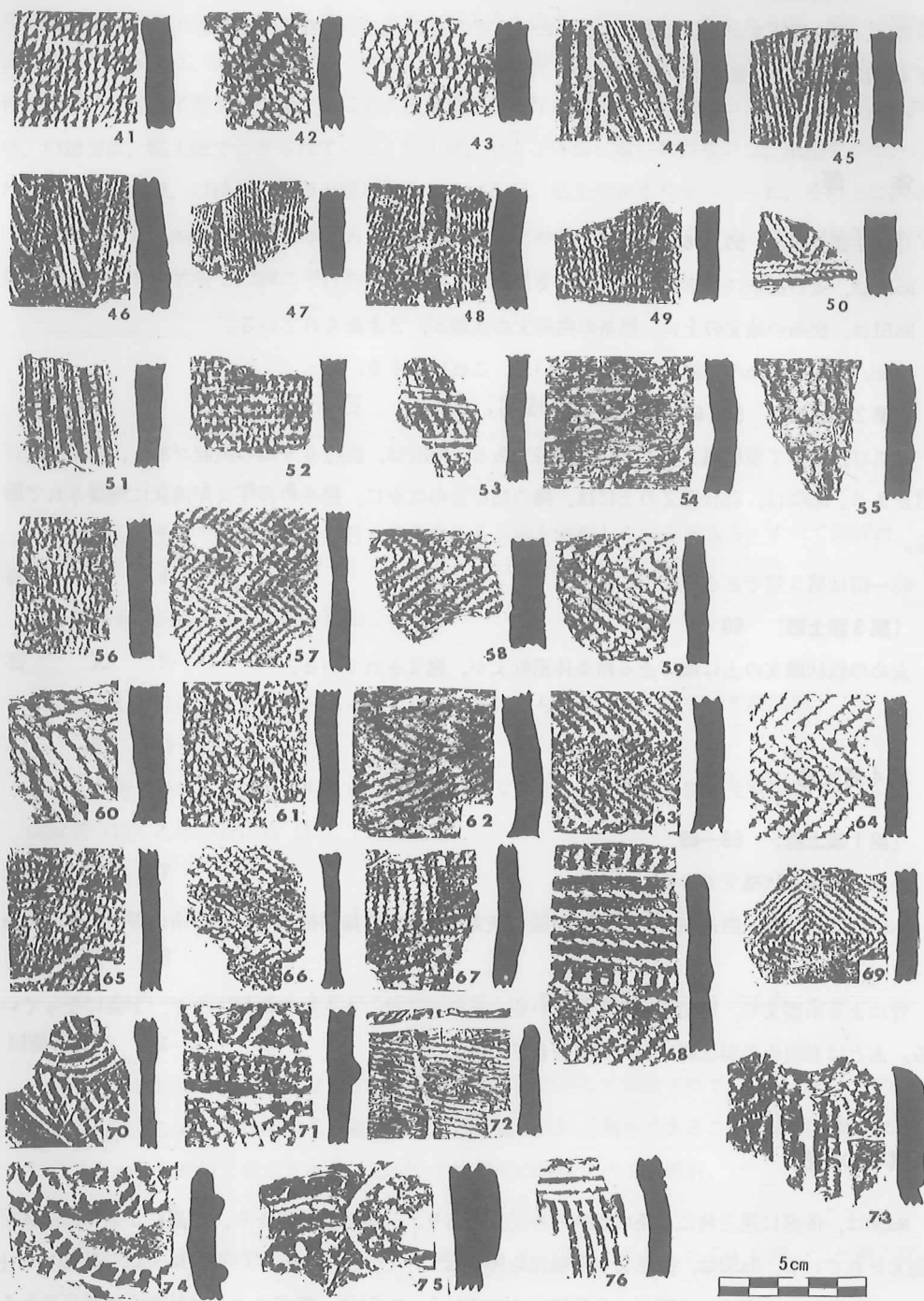


Fig 24 7月15日発掘土器(2)

No.17は、突起部である。口唇部から外面に撚糸文が右斜めに等間隔に押圧されている。口縁部文様帯は、繩の押圧文が、数条施文されており、その上に、山形の頂点から2条の平行な繩の押圧文が4 cmほどの長さで飾られている。

## 体 部

### 〔第1類土器〕 55, 56, 61, 65

No.55は、太い撚糸による押圧文が、施文されている。

No.61は、撚糸の地文の上に、撚糸の曲線文の沈線が、2本飾られている。

No.56, 65は、撚糸の曲線文の沈線がないが、これに類する。

### 〔第2類土器〕 57, 62~64, 66~67

これは、すべて羽状繩文による、文様帯である。No.57は、直径0.9 cmの突起があり、繩文の結び目がある。No.62は、羽状繩文の上には、繩の結び目のほかに、撚糸の押圧文が波状に施文されている。

63~67は第3層である。

### 〔第3類土器〕 60

太めの斜状繩文の上に横に走る絡条体廻転文が、施文されている。

## 第4層土器

### 〔第1類土器〕 68~69

いずれも、羽状繩文である。

No.68の口唇部は、撚糸の押圧文が等間隔に施文され、口縁は横に平行な撚糸の押圧文が、5条になっている。

竹による爪型文で、等間隔に飾られている。その下には、また撚糸の押圧文が、1条になっている。あとは右斜めの羽状繩文が、施文されている。

## 其他の土器

No.50は、体部に逆三角に3条の撚糸の押圧文があり、三角形の頂点から、垂直に3条の撚糸文が施文されている。No.52は、撚糸文（多軸絡条体廻転文）で、施文されている。No.53は、斜繩文の上には、半截竹管による平行沈線が、2条施文されている。No.54は、繩文によるいわゆる綾絡文である。No.71は、隆帯及び口縁の一部に、撚糸文を押圧し、以下は羽状繩文である。No.72は、細い横に走る

撚糸文で飾られた土器で、上から見て六角形を程する土器の一部であると思われるが、正しい形はわからない。No.73は、口縁突起部の一部で、頂部を指で押し、それから垂直に2条の隆帯がつけられている。口唇に爪型文、口縁に縄による撚糸文が、平行に隆帯とその間につけられている。No.74は、口縁部は、粘土紐でかざられている。粘土紐、および体部に鋭い刻目なし、爪型文がつけられている。No.75は、口縁の一部の上部は欠失しているが、粘土でかざりがつけられ、その上に撚糸文を施している。No.76は、口縁部であり、No.70と同じ土器の一部と考えられる。この口縁部は折り返しの複合、半截竹管で口縁に平行および斜行する文様帯が施行されている。

## 石 器〔第24図〕

### 撚 器 1～3. 5, 6

片面加工でそれぞれ(5, 6)打ちこぶのある石器を剥離した凹みがある。すべて流紋岩。

### 握 斧 4

片面加工で打面を残した剥片石器である。

### 石 刃 9～11

片面加工で刃に使用痕が見られる。9は図の裏に打ちこぶがある。すべて流紋岩。

### 石 錘 12～15

ひもを巻きつけて下げるおもりとして両端にえぐりをつけている。扁平な凝灰岩(13, 14)、流紋岩(12)と厚い安山岩(15) 1は凝灰岩。

### 石 の み 7

小形の細長い円礫の片面の先端を磨き片刃をつけたもので緑泥質岩。

### 磨製石斧 8

刃の上端の一部だけであるが定角式と呼ばれているものである。プロピライト。

### 川原石石器 16～25

16～18は片面は片面が薄くなっていることから打撃用として使用されていたらしい。その他は、はっきりした用途は不明だが考えられることは、形が三角形であることや表面が磨かれていることから装飾用と推定される。23がれき岩でその他はすべて凝灰岩。

### 凹 石 27

楕円形の石の表面を磨き片面中央に凹みがある。木の実などを割ったらしい跡が二ヶ所くぼんでいる。安山岩。

### 垂 飾 28

側面に1つの孔がある。装飾用に使われたらしい。凝灰岩。

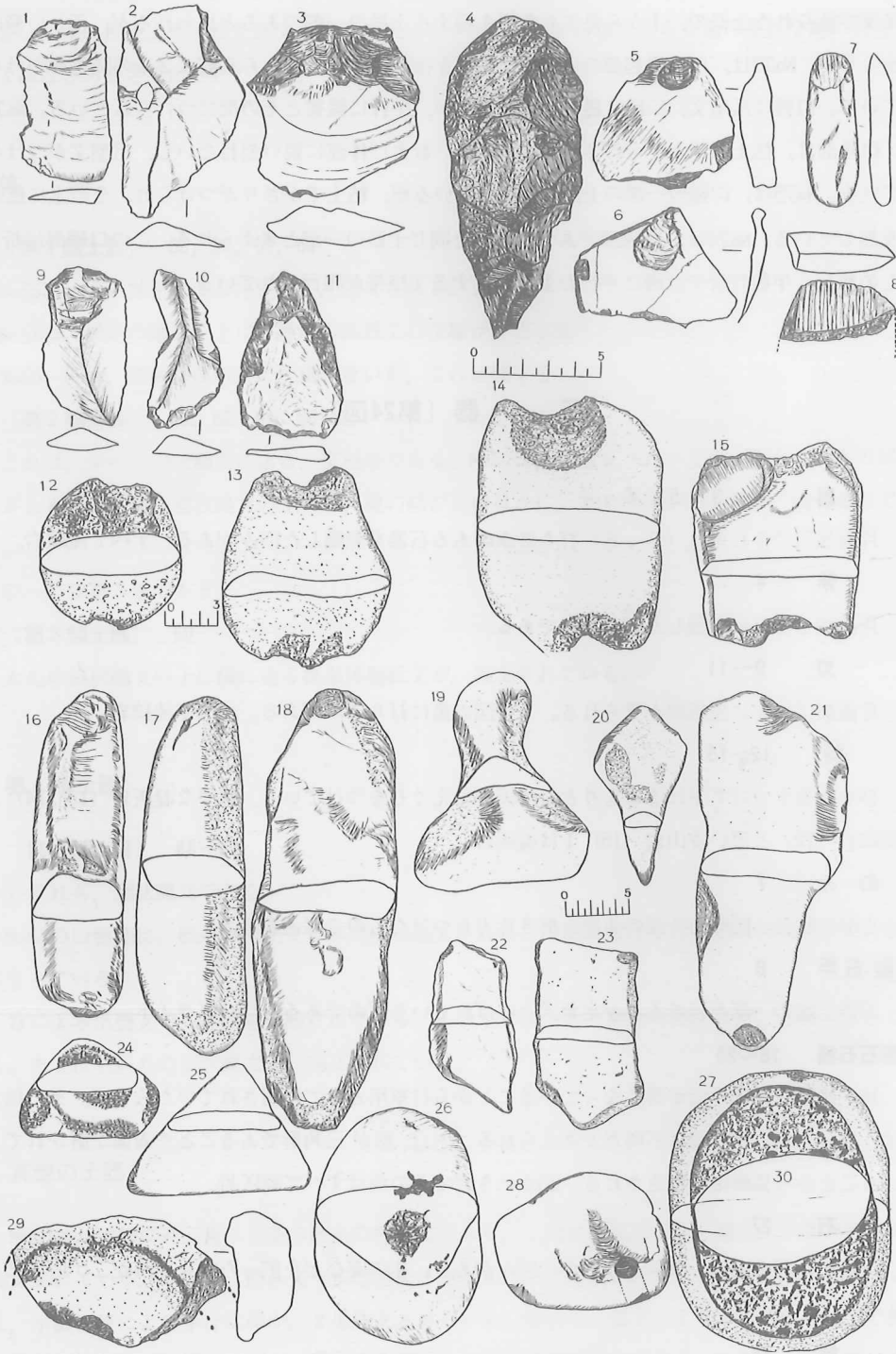


Fig 25 7月15日発掘石器

## 石 皿 29

一部分なのではっきりしないが打ち欠きを加えて粗雑に形を整えたいが、使用度が少いらしく磨耗が小さい。

2は半分だけが使用されていたらしく他面より落ちこんでいる。共に凝灰岩。

## 磨 石 30

扁平楕円形の石の表面を磨き上げている。安山岩。

## 考 察

第23図と第24図の土器は、その大部分が縄文時代前期末の円筒下層d式土器である。しかし中には8、15、53、55、60、70、73、74、75、76、のように円筒下層d式以外の土器も見られる。

このうち、70、73、74、75、76は縄文時代中期の円筒上層式と、これと同期に他地域から渡来した円筒上層式以外の土器(70、76)もあるように考えられる。

また15、62などは円筒下層式の古い方の土器であろう。したがって、この地点の下層にある土器は、円筒下層式のc式以下と推定され、上表面は円筒下層d式でまたその上層に当るものとして円筒上層の各式がある可能性をもっている。

### 参 加 者

発掘指導 奥山 潤

顧 門 田中修造

2 年 斉藤由美子 斉藤亮子 斉藤幸子 鈴木共子 高島郁子 渡辺由美子 成田多喜子  
高杉裕見子

1 年 原 清子 原田幹子

### 〔編者注〕

この土器の説明を読むと、意味が通じないところが多い。正しく物体を表現記述することができないことに注目したい。

## 付 録 II

### 餅田家敷添発掘のピット〔第26図〕

6月21日、芋掘沢での遺構発見のための練習発掘終了後、約300mほど西の、高清水清八氏所有牧草地の西端で発掘練習を継続した。

この地点は円筒下層d式から全上層A式の良好な包含地であるとのことであるが、せまいトレンチでは土器出土は少なく、まとまる遺物は出土しなかったが、第26図のような小さい円筒形ピットが発見された。このピットの開口部には、小さい石組みがあり、組石下約10cmに2.3片の土器片が同一面上におかれていた。ピットの深さは24cm、ピット開口部の直径は東西29cm、南北26cmであり、土器片も石組もピットを埋没してからおかれたものと判断された。

このようなピットは、やはり一種の埋葬施設で、死産胎児か胎盤を埋めたものと考えられる。

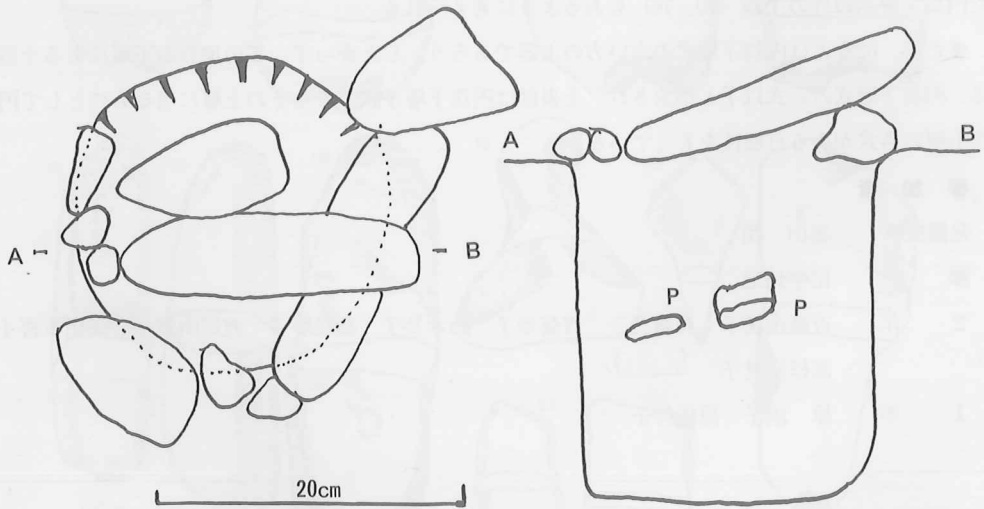


Fig26 餅田家敷添発掘のピット

#### 参加者

- |      |      |                   |
|------|------|-------------------|
| 発掘指導 | 奥山 潤 | 高橋昭悦              |
| 顧 門  | 田中修造 |                   |
| 3 年  | 大黒幸子 | 釜谷睦子 佐藤和子         |
| 2 年  | 高島郁子 | 斉藤由美子 渡辺由美子 藤盛由美子 |
| 1 年  | 原田幹子 |                   |

## 付 録 Ⅲ

この報告書を教材として扱われる  
市内小・中学校社会科担当の先生方に

大館市芋掘沢遺跡の土器は、縄文時代前期といわれる時代の、円筒下層式土器を主体とするものです。

この土器そのものと、それを含む縄文前期の東北北部の文化内容について少し説明を加えておきたいと思います。

### 1 円筒下層式土器の編年上の位置について

縄文時代を、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期、続縄文期に分けますが、各期はそれぞれ10型式ぐらいの土器をふくむと考えられます。その10型式は同時のものでなく、化石と同じくそれを包含する層位別に分類したのですが、ある一地点にそれが全部累層していることはまずありません。

従って芋掘沢には円筒下層 a 式から d 式までの各式と、わずかの a 式以前の数型式があるだけで、a～d が前期の後半期にあたり、前半期は、市内福館と田代町茂屋下岱と田ノ沢を合わせたものがほぼこれに当たります。その各累層の厚さの合計は期の前半と後半では 2.5 m にも達すると考えられます。遺物出土地の地形的条件が異り、前半の終りごろ、後半の約半分、その残りの半分は割合一地点に定着していますが、前半の早い頃の遺跡はめつたになく選択性に富むようです。

### 2 円筒式土器の分布圏（文化圏）について

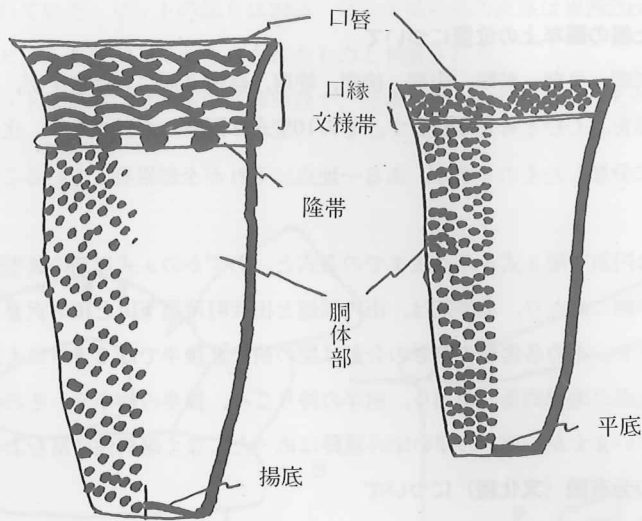
円筒下層式の土器、つまりそれらを作り、使用した人々の居住圏は、北海道の札幌低地帯以南、東北では秋田県、山形県の県境と岩手県、宮城県境までですが、内陸では田沢湖付近までとみられ、その南には仙台湾の大木団貝塚を標式とする大木式土器の分布圏に入ります。しかし型式というものは、あまり大きい圏域にわたるものでなく、江戸時代の中程度の「国」ぐらいの範囲内の一時期の土器につけられるべきもので、従って円筒下層式と言っても、地方によってずいぶん異なる「地方色」をもち、厳密に言えば、その各地方色の土器はそれぞれ別の型式名で呼ばなければならないでしょう。円筒土器の広すぎる分布圏は、その型式名のもつ概念によるものようです。同時期の大木式は標準遺跡の土地名で呼ばれます。それが普通です。しかし円筒式はその土器の形の上からの呼び名です。

### 3 円筒土器の形

およそ縄文前期から中期にかけて、土器の形は深い鉢形が多いのですが、円筒式土器は特に器高が口、底径に対して大きい比をみせます。中にはそれこそ煙突を切ったようなひょろ長いものもあります。

命名者の人類学者長谷部言人博士は、こういう背の高い土器を作った種族は身長が高かったと考え、今でもその分布の中心区域の青年の平均身長が高いということを言ったことがあります。土器を作るにはすわって作ったでしょうから、座高が高くなければ、高さが高いものは作れないはずで、面白い考え方でしょう。反面、この地域の食糧事情や、その人々の食生活によることかもしれません。東北部は貧乏といわれ、背も低いのが普通ですがその社会学的原因にも思い当るふしがないでもありません。

ともかく円筒型、またはそれに近い形であるこの器は、図のような基本型を示します。口縁部



には文様帯があり、胴部とは異なる文様がありますが、これが胴の中央にまで及ぶことも多く、底にも縄文のあるものがあります。口縁部と胴の境には縄を押した一線または土をつまみ上げたり、または粘土紐を貼りつけた隆帯があります。口縁はいわゆる平縁が多く、稀に波状を呈しますが、突起のあるものは少ないようです。文様は線をひいたものは少なく、下層式では他に飾りはありません。大木式では、大木2式から粘土紐の飾りがつきます。縄の文様は、口縁部では押圧、胴部では縄そのものを器面に廻転させたものや、縄を棒に巻いてころがしたものがあり、考えられるあらゆる種類の縄（或いは紐）の組み方がほゞそろっていて、その工芸文化は高度のものであったと思われま

す。底も平底で、揚底もあります。前期の終り頃になると方型や楕円の深い皿のようなものが出て来ますし、胴下半が細く上半が大きい、煮沸に火の当りの都合のよい形のものも出てきますが、あまり変わった形のものはありません。



胎土、土器を作った粘土ですが、幅4～5cmの長い粘土の板2枚の間に植物の繊維をはさんでいることが、土器の割れ目でよくわかります。そのサンドイッチ状の粘土板で輪を作り、それを重箱のように重ねて全型を仕上げ、縄文をつけ、内側にはよい粘土でうすいライニングをして、それをよく磨いて滑面にしてあります。円下d式の次の円筒上層A式までは、胎土に繊維を混じています。

遺跡を掘ると、土器の数がずいぶん多いのですが、どうしてもこわれ易いので、沢山作ったと思われませんが、それでも穴があげばふさぎ、割れ目が入れば小孔を割れ目の両側につけ、紐を通してつなぎ、破損を除ぐという経済観念というか、修理習性のようなものが見られます。

大きいものばかりあるように書きましたが小形のものもあり、コップぐらいの土器も出てきます。子供にせがまれて作ったようなものでしょう。繊維や砂を入れるのは焼割れを防ぐためです。

#### 4 他の容器

土器面のあらゆる縄（組紐）をみるとこれだけのものを作った人々が、この組紐の技術で当然ハンドバックやバスケット、網状の袋、などを作ったことは考えられます。ヨーロッパの旧石器時代には、バスケット（手籠）をもってハンゴに登り、蜂の巣に近づく女性の姿を書いた絵があります。籠の方が土器よりも早く発生したのは当然と言えましょう。

#### 5 石器と石製品

当然のことながら、石器時代ですから、石の利器と、骨や角で作った道具があります。

前期の前半とちがって、大きい槍（投やり）先や、この報告書の石器写真にある有孔石板はありません。つまりこの有孔石板は円筒下層文化以前のもので、石の矢じり、投弾がありますから弓矢の文化です。そして食糧を得るために網もあり石の錘がありました。海岸ではモリもあります。ツリ針もあります。皮はぎも、石斧も石べらもあります。粉を作る石の皿もありました。狩と魚撈と採集の経済の時代でした。丸木舟もあったでしょう。

クマ、シカ、イノシシ、キツネ、タヌキ、アナグマ、ノウサギや海獣、鳥類のほか、海の大規模な種類の骨も貝塚ではみつかっています。

貝塚といえば秋田県でこの期の貝塚の調査されたところ（あったところ）は男鹿の八郎湖岸の牛込（美里町）と児桜（秋田市）だけです。

#### 6 埋葬と人骨

小児、特に新生児または早産胎児の場合は、土器に入れ石の蓋をし、またその土器のそばに平石をおき、マグロの切身を供献した例などがあります。大人の場合は屈葬で、北海道南部の円筒下層c式土器を伴う墓では横臥屈葬で、腹のあたりに底をぬいた土器を伏せてあったそうです。女性骨でしたので、石皿の破片と、その上を前後にすべらせて粉を作る石がおいてあったそうです。

女性は骨太で、骨は筋肉の付着面が粗く、筋肉の強さを思わせ頑丈で、歯は著しく咬耗を示し、下あごが角ばって発達していたと報ぜられています。

## 7 岩 偶

岩でつくつた人形(岩偶)がありますが、人間というよりはアザラシなどに似ています。手足の短いサリドマイド児のように見えます。おそらくアザラシが、精神生活の中の何かをしめていたのでしょう。そうだとすれば円筒文化人が北方系の文化をもつ種族で、アザラシをトーテムとしたと云えるかもしれません。

## 8 住 居

竪穴は円形で、発見例は少ないのですが、秋田県では円下d式期の竪穴が八幡平村玉内で戦後に発掘されています。

## 9 文化交流

円筒下層d式期には、南の大木文化圏との文化交流が多かったようで、大木式系の土器が混在してきます。

当時は海没期で、現在よりは平均の気温は高かったとされていますが、人々は夜も昼も屋外の生活を楽しんだようで、これは縄文時代のほぼ全期を通じて、土器の埋蔵のあり方などからそう考えられます。

## 10 縄文時代の年代について

縄文文化が何時頃からはじまったかについては、定説がありません。従来は、比較的年代のわかる弥生式文化のはじめ頃に、貨泉がその遺跡から発見されることなどからさかのぼって考え、適当と思われる年代を割りつけ、前期のはじまりが5000年ぐらい前という抽象的な概念で固めていました。戦後、遺跡から発見される、木炭や貝殻など、炭素の中に含まれている、微量の放射性同位元素から計算して、年代をきめる方法が考えられています。この方法により、土器の編年上の新旧という相対的前後関係はわかるようですが、必ずしも絶対年代が正しく出てくるとは思えないこともありました。

一応その放射性炭素によって示された、縄文前期の土器年代は、たとえば次のような実験結果を得ています。

| 時代区分 |       | C <sub>14</sub> 年代 |   |
|------|-------|--------------------|---|
| 早期   | 夏 島 式 | 7290±500B.C.       |   |
| ”    | 茅山下層式 | 5250±110B.C.       |   |
| 前期   | 黒 浜 式 | 3390±130B.C.       | この次期にあたり大木1式<br>円下a式は大木2a式に当<br>ると言われる。 |
| ”    | 諸磯b式  | 2820±170B.C.       |   |

しかし文化史上、器具の発達、日本の場合でも、西方大陸と対比してきめられなければならないという史観から、C<sub>14</sub>年代の古い方は認めず、最古の土器を3000~35000年前ぐらいと主張する理論もあります。この点を考慮されて、年代の取扱いを軽々しくされない方がいいと思います。

#### 11 遺跡の保護について

終りに、私は小・中学生が土器を掘ることは、彼等の興味の特徴からそう悪い行為とは思われません。しかし無断で他人の畑に入りこんで、畑地を荒し耕作のさまたげをしたり、また崖をくずしたりすること行為は、余りいいことと思われていないようです。

学術的に、石器時代の文化の全般にわたり判らない点がかかり多く、遺跡をこわされることは、学問調査のため支障を生じます。円筒下層土器の遺跡はたいへん深く、発掘もむずかしくまたその土器は割れやすく、復原も大変に困難なものです。また学校の教職にある方でも、文化財保護法によって届出で、認可されないでやると盗掘となり、せつ盗罪や文化財保護法、公務員法違反に問われることがあります。その点を考えられ、生徒諸君の御指導を御願いたい次第です。またもし土石器発見の情報があったら、教委社教課に電話で通知していただきたいと存じます。

現在の歴史教育で、先史時代はあっさり通りぬけているようですが、この時代は歴史教育でなくとも図工で芸術史・技術史として、また文化史として、あるいは国語でも取扱いができるでしょう。

土石器、遺構そのものに直面させ、自身が素直に何かを感じることは、教育の有効な方法であり得ると言えるでしょう。(奥山)

香川県立歴史博物館発行

(奥山 典)

1985年10月

香川県立歴史博物館 発行

香川県立歴史博物館 発行

---

# 芋掘沢遺跡発掘調査報告書

(奥山 潤)

---

昭和47年3月

発刊 大館市教育委員会

印刷 (有)大館孔版社